神戸教育短期大学

教育実践研究紀要

第３号〔2021 年度〕

教育実践研究論文

＜第３類＞
・保育内容・健康における教育内容の検討（３）　（山本　章雄）
　事例研究：学生の自己健康評価と健康観について

＜第４類＞
・コロナ禍における効果的なハイブリッド授業の試み　（吉富　由佳子）

＜第６類＞
・保育実習における身体表現遊びの実態及び　（川野　裕姫子・橘　三都・青木　宏樹）
　受講生の身体表現遊びに対する意識
　―保育者養成校における「身体表現Ｉ」の受講生を対象として―

ファカルティ・ディベロップメント委員会

神戸教育短期大学

教育実践研究紀要

第３号【2021】

［教育実践研究論文］

＜第３類＞

・保育内容・健康における教育内容の検討（３）　山本　章雄・・・
事例研究：学生の自己健康評価と健康観について

＜第４類＞

・コロナ禍における効果的なハイブリッド授業の試み　吉富　由佳子・・・

＜第６類＞

・保育実習における身体表現遊びの実態及び　川野　裕姫子・・・
受講生の身体表現遊びに対する意識
―保育者養成校における「身体表現Ｉ」の受講生を対象として―

第３類

保育内容・健康における教育内容の検討（３）

事例研究：学生の健康観と自己健康評価について

山本章雄

YAMAMOTO Akio

学生に対して「保育内容・健康」の授業を目的に則して効果的に実施するためには、学生の実態を充分に把握し講義を構築することが必須である。今回の研究ではこのような観点より、「健康」について学ぼうとする学生が、自分自身の健康状態をどのように認識しているのか、また、その認識はどのような健康観によってもたらされているのかを明らかにし、これに対応した授業カリキュラムを構築するため、アンケート調査を実施し「テキストマイニング」の手法により分析を行った。

その結果、学生の「健康観」は、心身が良好な状態である（生理的健康観）と適正な生活を行っている（生活的健康観）によって構成されており、健康状態の認識においては56.9%の学生が主に生理的健康観に基づき「健康である」と考えていることが明らかとなった。また、健康状態の認識の違いによって「健康観」に差異があることも示唆され、今後の授業カリキュラム作成に向けての基礎資料を得ることができた。

キーワード：保育内容「健康」、教育内容、健康観、自己健康評価、テキストマイニング

1. はじめに

「健康観」をどのように捉えるかの議論は、多くの識者によって行われている。甲斐[1)]は、「健康観」(Health View)とは健康の概念であり、健康がどのような要素によって構成されているかの「健康構造論」や、健康にどのような価値を置くかと言った「健康価値論」などがその内容として考えられるとしている。一方、「健康感」(Perceived Health、Self-rated Health、Subjective Health）は、人が自分の健康状態をどのように評価するかということであり、個人レベルで考えると「その人がどのような健康観を持っているかが健康感に大きな影響を与えるだろう」と述べている。

野尻[2)]は、「生態的健康観」を提唱しており、健康観は３重構造として理解するのが適当であり、生理的健康観（生命的視点）、生活的健康観（生活的視点）、生存的健康観（人生的視点）で構成されるとしている。その内容は、生理的健康観を、人間の内的環境（身体

と精神の状況）が外的環境（人を取り囲む状況）に抗して動的平衡状態（Dynamic equilibrium）を獲得しようとするホメオスタシス（Homeostasis）としての健康観であると扱い、生活的健康観を、生活の質（Quality of life）を良くすることを目指す健康観として位置づけ、生存的健康観を、地球温暖化防止を始めとする、地球環境保全行動を目指した健康観として概念化するものである。

また、杉本[3]は、健康観の変遷をレビューし「状態としての健康」（病気でない状態が健康である）から大転換が行われ「過程としての健康」　（「健康生成論」を論拠に、健康と健康破綻を連続体と見なし、病気を予防・治療することと健康を生成することは異なるとする考え方）への概念移行が行われたと述べている。

一方、世界保健機関（World Health Organization ： WHO）は「健康の定義」を憲章前文（1946年）において示しており、この考え方が多様な人々の「健康観」に影響を与えていると考えられるが、生田[4]はこの定義に関する今日的な問題点を以下のように指摘している。１）ＷＨＯの健康の定義は抽象的理解にとどまっており、身体的健康、精神的健康、社会的健康の掘り下げが充分でない。２）健康は単に疾病がないという状態ではなく、人間生活の満足をもたらす総合的な状態であることを示したことは画期的であるが、「理想目標」に終始し「現実の健康目標」が明確でない。３）簡明で秀でた健康概念であるため、理解が出来たような錯覚をもたらす定義である。４）自然環境に言及しておらず、また、健康的な社会づくりのへの言及も不十分で、生態学的視点に欠ける。５）簡潔で総合的な定義であるため健康の定義についての議論を妨げ、様々な健康観の構築を矮小化させている。また、こうした問題点を手掛かりにし、「オタワ憲章」（1986年）で述べられている『健康は身体的能力であると同時に社会的個人的資源であり、Quality of life の重要な要素である。』に準拠した、拡大された健康観が必要となってきていることも指摘している。

立川[5]は、日本人の健康観を歴史的に概観し、江戸時代に貝原益軒が著した「養生訓」で展開される思想「気」と「自然治癒力」が日本における健康の考え方の中核であると述べている。この思想は、今日の「体調」の語彙である「心身相関のホリスティック的な考え方で、体を単に鍛えるのでなく、気を整え、心を静かにすることにより獲得される落ち着いた状態」にも通じるもので「人はいつも健康でおれない、良いときもあれば悪いときもある、その時その人なりに状態が安定していれば良い」とする健康観であると論じている。また、この様な考え方は「半健康人」が人口の36%にも達し、健康を気にする人、軽い症状でも医療にかかる人が多くなった現代、人々が「健康とおおらかに」対応していくためにも、必要な考え方であると説いている。

近藤[6]は、日本人の健康意識と行動について論考を行い『わが国では近代になってからも、身体や健康の価値性が自分自身によってではなく、つねに国家や社会、そして「他人の眼差し」によって規定されてきた歴史がある。これからはそのような過去の歴史と訣別し、健康を「人間であることの証し」と受け止めて自ら主体的にその充実を図る、本当の意味での「健康の時代」にしたいものである。』と著し、パターン化された日本人の健康意識、健康行動の無自覚性を大問題であると指摘している。

上述のように、「健康観」には様々な歴史的推移や多様な捉え方が存在することが明確となり、これを踏まえた「健康観」へのアプローチが重要であることが確認された。本研究では、この様な先行研究結果を礎にし、学生の「健康観」の現状について検討を行うこととする。

学生の「自己健康評価」に関しては、木本ら[7]が、学生が自らの健康状態を正しく理解し、健康増進に努めているかを明らかにするための調査を行っており、20％の学生が「健康でない」と回答し、その背景には漠然とした健康への不安があることも予想されるが、実際に慢性的な疲れや心の問題を抱えている学生が多いことを見出している。また、こうした学生の「健康観」には、インターネットを始めとするマスメディアからの情報の影響が大きいことも指摘している。

小泉ら[8]は、学生自身の健康に関する関心度や自信度、健康であると考える状態、健康の阻害要因などについて調査を実施し、健康への関心度は高いが健康である自信度は低く、睡眠、１日３回のバランスの良い食事、適度な運動が健康状態を支え、ストレスや不規則な食事、睡眠不足が健康の阻害要因であると、学生が考えていると結論づけている。

藤澤ら[9]も学生の「自覚的健康状態」の状況を調査するため８群（１．運動、２．栄養、３．休養、４．環境、５．障害・疾病、６．娯楽・趣味、７．遺伝、８．その他）７３項目で構成された調査を実施し、40.3％の学生が「健康状態が良くない」と回答したと

報告している。また、高い健康意識を持つ学生は健康行動に於いても積極的であることが見出されたが、健康状態と健康意識、健康行動には相関関係が認められなかったことを結論で述べている。

一方、藤永ら[10]は看護学生の「健康意識」「対処行動」についてテキストマイニング法（大量の文章中に出現する単語や単語間の関係を解析し、統計処理する技術）により分析を行い、学生たちが精神的、身体的変化を自覚症状や客観的な値により把握し、自身の健康状態を評価していることが明確になったと述べている。また、学生たちは症状の出現を放置せず改善するための対処行動を行ってはいるが、短期的で安易なものであることも見出している。

今村[11]は、保育士を目指す学生に対して「健康観」および「健康状態に関する主観的評価」の調査を質問紙により行い、主観的評価においては94.8%の学生が自身の状態を「健康である」と考えていると報告している。また、健康に関わる「生活習慣」についても調査を実施し、朝食摂取率67.9%、飲酒習慣なし60.6%、禁煙率97.1%、習慣的運動実施率52.4%、痩身願望率83.1%などの数値結果を得ており、自分の健康は自分の行動（努力）で決まるといった意識を持っていたことも併せて述べている。

島本ら[12]は、学生の主観的健康度（自己の健康感）と精神的健康度、抑うつ度、ストレス対処能力との関係性について研究を行い、学年が高くなるほど主観的健康度の評価が悪くなり、これは精神的健康度の劣化や抑うつ度の上昇と相関していると考察をしている。逆に、ストレス対処能力は学年が進むほど高くなる傾向が見られ、低学年からのストレス対処能力向上対策が必要であることを提示している。

今回の研究では、将来の保育者を目指す学生達に「保育内容・健康」の授業を学生の実態に応じた内容で実施するため、基礎的な情報として必須である「学生の健康観」および「自己健康評価」がどのような状況にあるかを知るため、調査を実施し分析を行った。

調査は、個々の学生が「健康観」をどのように認識しているかを、多様性を重視する立場より明らかにするため、選択による回答方法は採らず、自由記述によるアンケート調査を用い実施した。また、「自己健康評価」（健康感）の調査においても、学生の主体的な評価を把握することを目的に自由記述による回答を求める形式でアンケートを実施した。

なお、アンケート調査の集計・分析に関しては、自由記述によって回答された、学生の全体的傾向や健康観と自己健康評価の関係性を分析するために必要となる、「単語出現頻度・スコア」「係り受け解析・スコア」の数値が抽出できる「テキストマイニング」の手法を用いて検討を行った。

（ユーザーローカル：テキストマイニングツール）
（https://textminiing.userlocal.jp/）

2. 方　法

Ⅰ．調査の方法および集計について

「保育内容・健康Ⅰ」を受講している学生の健康に関する考え方「健康観」および、自分自身の健康状態の認識「自己健康評価」を明らかにするため、また、「自己健康評価」の違いによる「健康観」の差異を検討するため、以下のようなアンケート調査を実施した。

調査期間：令和3年4月7日～4月13日
調査対象：K短期大学「保育内容・健康Ⅰ」受講学生102名（1回生48名・2回生54名）
調査方法：調査用紙による自由記述回答
調査項目：「健康観」について
『健康とは、いったいどのような事だと考えますか？』
「自己健康評価」について
『あなたは今「健康」ですか？』
『では何故そのように思うのですか？』
集計分析：自由記述で得た記載内容をすべてテキストデータとし、テキストマイニングツール（Social Insight社：UserLocalテキストマイニング）を用い集計分析をした。

Ⅱ．「健康観」における全体的特徴・傾向について

受講学生全体の「健康観」の状況を明らかにするため、テキストマイニングによる「単語出現頻度・スコア」「係り受け解析・スコア」の指標を用い、全体的な特徴や傾向の分析を行った。

Ⅲ．「自己健康評価」について

「自己健康評価」において「健康である」「健康でない」「どちらでもない」と評価する学生の分類を、テキストマイニングの内容を用いて行い、人数および比率を算出し状況の検討を行った。

Ⅳ. 「自己健康評価」の違いと「健康観」の差異について

自己健康評価において「健康である」「健康でない」「どちらでもない」と記載した学生を３グループに分割し、３グループそれぞれの「健康観」の状況を明らかにするため、テキストマイニングによる「単語出現頻度・スコア」「係り受け解析・スコア」の指標を用い傾向の分析を行った。また、３グループ間の差異を検討するため傾向の比較を行った。

Ⅴ. テキストマイニングの指標について

「単語出現頻度・スコア」

自由記述文書において出現する「単語」の頻度を「単語出現頻度」として回数を表記した。また、「スコア」は、一般的な文章で良く出現する「単語」（思う・である・今日）は本研究において重要でないため重み付けを軽くし、逆に、研究対象文書に特徴的に出現する「単語」に重み付け（ＴＦ−ＩＤＦ統計処理）を行った数値であり、これを「単語」の重要度尺度として表記した。

「係り受け解析・スコア」

自由記述文書における文節の、「名詞」に係る「形容詞」「動詞」「名詞」の「修飾−被修飾」の関係を抽出し、そこに使用されている「単語ペア」の出現回数を頻度として表記した。また、「スコア」は、総ての係り受け関係に対する当該係り受けの出現割合を複合的に算出した数値で、係り受けの重要度尺度として表記した。

3. 結　果

Ⅰ.「健康観」の全体的な傾向について

「保育内容・健康Ⅰ」を受講している学生に対して「健康観」の考え方を尋ね、自由記述で回答した内容の「単語出現頻度・スコア」の結果を示したものが表.１である。

これを見ると、単語では「元気」(29)、「心」(25)「病気」(21)「生活」(16)「運動」(13)「心身」(11)「安定」(11)が多く出現しおり、重要度では「心身」(18.68)「身体的」(14.85)「病気」(14.30)「規則正しい」(13.18)「元気」(6.57)が高い得点となっている。

表. 1 「健康観」の「単語出現頻度・スコア」
（頻度上位２０位）

		頻　度	スコア
１）	元 気	29	6.57
２）	心	25	4.00
３）	病 気	21	14.30
４）	状 態	18	3.86
５）	生 活	16	3.48
６）	できる	15	0.29
７）	運 動	13	6.09
８）	心 身	11	18.68
９）	安 定	11	2.44
１０）	毎 日	10	0.71
１１）	良 い	9	0.11
１２）	健 康	8	2.07
１３）	ケ ガ	7	10.10
１４）	精神的	7	3.76
１５）	食べる	7	0.08
１６）	身体的	6	14.85
１７）	睡 眠	6	1.31
１８）	食 事	6	1.20
１９）	過ごす	6	0.70
２０）	規則正しい	6	13.18

また、「健康観」に関する「係り受け解析・スコア」の結果を示したものが表.２である。

これを見ると、「病気―かからない」(6)「身体的―精神的」(5)「精神的―安定」(4)の係り受け出現頻度が多く、係り受けの重要度においても高めの数値(6.00～1.67)となっている。

表. 2 「健康観」の「係り受け解析・スコア」
（頻度上位 10 位）

			頻　度	スコア
１）	病 気	かからない	6	6.00
２）	身体的	精神的	5	3.75
３）	精神的	安 定	4	1.67
４）	病 気	ケ ガ	3	1.50
５）	心	健 康	3	1.33
６）	心 身	安 定	3	1.00
７）	運 動	適 度	3	0.86
８）	元 気	状 態	3	0.63
９）	元 気	過ごせる	2	1.50
１０）	調 子	良 い	2	0.60

Ⅱ．「自己健康評価」について

「自己健康評価」における学生の回答内容は表．３に示すとおりである。これを見ると１０２名の中で「健康である」とした学生が５８名(56.9%)、「健康でない」が２０名(19.6%)、「どちらでもない」が２４名(23.5%)の人数および構成比率であることが示されている。

表．３　「自己健康評価」の回答数と比率

項　目	人　数	（比率）
健康である	58	(56.9%)
健康でない	20	(19.6%)
どちらでもない	24	(23.5%)
合　計	102	(100.0%)

Ⅲ．「自己健康評価」の違いと「健康観」の差異について

「自己健康評価」において「健康である」「健康でない」「どちらでもない」と回答したグループそれぞれの「健康観」の特徴や傾向を明確にするため、グループ毎の「単語出現頻度・スコア」「係り受け解析・スコア」の算出を行った。

Ⅲ-①「健康である」と回答した学生の「健康観」について

「健康である」と回答したグループの「健康観」の「単語出現頻度」の結果を示したものが表．４であり、「係り受け解析・スコア」の結果を示したものが表．５である。

これを見ると、単語出現頻度において「元気」(22)「心」(17)「病気」(13)「生活」(8)「健康」(5)の出現が多く、重要度では、「身体的」(8.06)「病気」(5.95)「ケガ」(3.95)「元気」(3.85)「食生活」(3.53)が高い得点となっている。

また、単語の係り受けにおいては「病気―かからない」(5)「身体的―精神的」(3)「生活―送れる」(2)「元気―過ごせる」(2)の出現頻度が多く、重要度においても比較的高い数値(5.00～2.00)となっている。

Ⅲ-②「健康でない」と回答した学生の「健康観」について

「健康でない」と回答したグループの「健康観」の「単語出現頻度」の結果を示したものが表．６であり、「係り受け解析・スコア」の結果を示したものが表．７である。

これを見ると、単語出現頻度において「運動」(5)「元気」(5)「病気」(4)「生活」(4)「心身」(3)「安定」(3)「ご飯」(3)「心」(3)が多く出現しており、重要度では、「心身」(2.02)「ケガ」(1.15)が高い得点となっている。また、単語の係り受けにおいては「ご飯―食べる」(3)「病気―持つ」(2)の出現頻度がやや多く、係り受けの重要度においても 1.00 を超える数値(3.00～1.50)を示している。

表．４「健康観」の「単語出現頻度・スコア」
「健康である」グループ（頻度上位２０位）

		頻　度	スコア
１）	元気	22	3.85
２）	心	17	1.88
３）	病気	13	5.95
４）	できる	10	0.13
５）	生活	8	0.90
６）	毎日	8	0.46
７）	状態	7	0.61
８）	良い	7	0.07
９）	健康	5	0.84
１０）	かかる	5	0.17
１１）	安定	5	0.53
１２）	身体的	4	8.06
１３）	ケガ	4	3.95
１４）	食生活	4	3.53
１５）	心身	4	3.44
１６）	運動	4	0.64
１７）	睡眠	4	0.59
１８）	痛い	3	0.04
１９）	規則正しい	2	2.27
２０）	暮らせる	2	1.69

Ⅲ-③「どちらでもない」と回答した学生の「健康観」について

「どちらでもない」と回答したグループの「健康観」の「単語出現頻度」の結果を示したものが表．８であり、「係り受け解析・スコア」の結果を示したものが表．９である。

これを見ると、単語出現頻度において「心」(5)「心身」(4)「運動」(4)「病気」(4)「生活」(4)「早寝」

表. 5 「健康観」の「係り受け解析・スコア」
「健康である」グループ（頻度上位 10 位）

			頻　度	スコア
１）	病 気	かからない	5	5.00
２）	身体的	精神的	3	3.00
３）	生 活	送れる	2	2.00
４）	元 気	過ごせる	2	2.00
５）	生 活	出来る	2	0.55
６）	普 通	出来る	2	0.55
７）	心	気持ち	2	2.00
８）	食生活	運 動	2	1.20
９）	病 気	ケ ガ	2	1.20
１０）	心	健 康	2	1.20

表. 7 「健康観」の「係り受け解析・スコア」
「健康でない」グループ（頻度上位 10 位）

			頻　度	スコア
１）	ご 飯	食べる	3	3.00
２）	病 気	持 つ	2	1.50
３）	調 子	良い	1	1.00
４）	心	落ち着く	1	1.00
５）	病 気	かかる	1	1.00
６）	生活リズム	整える	1	1.00
７）	安 定	保つ	1	1.00
８）	一日	食べる	1	1.00
９）	元 気	過ごす	1	0.67
１０）	運 動	食べる	1	0.50

表. 6 「健康観」の「単語出現頻度・スコア」
「健康でない」グループ（頻度上位2０位）

		頻　度	スコア
１）	運 動	5	0.99
２）	状 態	5	0.31
３）	元 気	5	0.21
４）	病 気	4	0.63
５）	生 活	4	0.23
６）	心 身	3	2.02
７）	安 定	3	0.19
８）	ご 飯	3	0.08
９）	心	3	0.06
１０）	持 つ	3	0.03
１１）	食べる	3	0.02
１２）	できる	3	0.01
１３）	ケ ガ	2	1.15
１４）	共	2	0.27
１５）	食	2	0.17
１６）	睡 眠	2	0.15
１７）	ストレス	2	0.03
１８）	幸 せ	2	0.03
１９）	過ごす	2	0.08
２０）	以下は「頻度１」のため省略		

表. 8 「健康観」の「単語出現頻度・スコア」
「どちらでもない」グループ（頻度上位2０位）

		頻　度	スコア
１）	状 態	6	0.45
２）	心	5	0.17
３）	心 身	4	3.44
４）	適度	4	2.36
５）	運 動	4	0.64
６）	病 気	4	0.63
７）	生 活	4	0.23
８）	早寝	3	1.60
９）	精神的	3	0.77
１０）	早起き	3	0.37
１１）	健康	3	0.31
１２）	安定	3	0.19
１３）	規則正しい	2	4.44
１４）	身体的	2	2.67
１５）	バランス	2	0.20
１６）	楽しい	2	0.20
１７）	過ごす	2	0.08
１８）	取れる	2	0.05
１９）	食べる	2	0.01
２０）	出来る	2	0.01

表. 9　「健康観」の「係り受け解析・スコア」
「どちらでもない」グループ（頻度上位 10 位）

			頻　度	スコア
1）	適度	運動	3	2.10
2）	身体的	精神的	2	1.50
3）	元気	状態	2	1.50
4）	健康	健康でない	2	0.83
5）	ゆとり	持てる	1	1.00
6）	早寝	ご飯	1	1.00
7）	早起き	ご飯	1	1.00
8）	生活	送る	1	1.00
9）	病気	ケガ	1	1.00
１０）	バランス	良い	1	1.00

(3)「精神的」(3)「早起き」(3)が多く出現しており、重要度では、「規則正しい」(4.44)「心身」(3.44)「身体的」(2.67)「適度」(2.36)「早寝」(1.60)が高い得点となっている。また、単語の係り受けにおいては「適度―運動」(3)「身体的―精神的」(2)「元気―状態」2)の出現頻度が多く、係り受けの重要度においてもやや高い値(2.40～1.50)を示している。

4．考　察

Ⅰ．「健康観」の全体的な傾向について

学生が持つ「健康観」を単語の出現頻度から見ると、「元気」「心」「病気」「心身」が上位を占めており、「体と心に元気があり病気でないことが健康である」と考える学生が多いことを示している。これは野尻[2]が提唱する「生理的健康（生命的視点）」をベースとして健康を捉える傾向が学生達に強いことを意味しており、近藤[6]や木元ら[7]が論じているように、社会やマスメディアからの影響を受け伝統的で常識的な「健康観」を基本的に身に付けていると推論することができる。単語出現頻度において次に多いのが、「生活」「運動」「安定」であり、「運動を実施すること等により生活を安定させることが大切である」とする考え方が「心身の健康」に次いで重要であると考えている学生の状況を表していると思われる。これは「生理的健康（生命的視点）」に次いで「生活的健康（生活的視点）」も重要であると思考する「健康観構造」の多様化であり、杉本[3]が述べている「状態としての健康」から「過程としての健康」への概念移行が、学生の中にも芽生えていることが推察される。しかし、出現頻度が多い単語（上位20位まで）の中には「環境保全行動」に関するものは見当たらず、学生達の考えが「生存的健康観（人生的視点）」までには及んでいないことも明らかとなった。

単語の重要度においては「心身」「身体的」「病気」「規則正しい」「元気」が上位を占めており、単語出現頻度の状況とほぼ同一であるが、唯一「規則正しい」が重要度において加わっており、生活を安定させる行為として「規則正しく行動する」ことの大切さも意識していることが示された。

単語の係り受けにおいても「病気―かからない」「身体的―精神的」「精神的―安定」の数値が高くなっており、「心身が安定し、病気にかからないことが健康である」と考える学生の健康概念の様子が明確となった。

Ⅱ．「自己健康評価」について

学生が自分自身の今の健康状態をどのように考えているかを調べた「自己健康評価」においては、１０２名の中で５８名(56.9%)の学生が「健康である」と回答している。これは、今村[11]が行った保育士を目指す学生への「主観的評価」の結果（「健康である」94.8%）、また、木元ら[7]が女子大学生を対象に実施した調査結果（「健康である」80%）と比較するとかなり低い値となっている。一方、藤澤ら[9]が「自覚的健康状態」を四選択肢法により行った調査では「健康である」が59.7%となっており、今回の調査とほぼ同じ割合となっている。これらの数値は、調査の時期、調査の方法、学生達の現状等に大きく影響されることが必定であるため、単純に比較することは妥当性を欠くと考えられるが、一般的な大学生の健康状態評価と比べて、調査時点での「保育内容・健康」受講学生の肯定的な「自己健康評価」は低いレベルであったと考えることが出来る。

その他の学生は、２０名(19.6%)が「健康でない」と回答し、２４名(23.5%)が「どちらでもない」と回答を行っており、「自己健康評価」の全体的傾向としては「健康である」半数、「健康でない」1/4、「どちらでもない」1/4 の状況であることが明らかになった。

Ⅲ．「自己健康評価」の違いと「健康観」の差異について

「健康観」の形成において学生達は様々な事象より影響を受けていることが予想される。甲斐[1)]は、「自己健康評価」（甲斐は「健康感」として扱っている）は、人が自分の健康状態をどのように評価するかということであり、その人がどのような「健康観」を持っているかが「自己健康評価」（健康感）に大きな影響を与えるだろうとしている。今回の研究では、この因果関係に注目し、「健康である」「健康でない」「どちらでもない」として「自己健康評価」を持つ学生達が、それぞれどのように特徴的な「健康観」を有しているかを明らかにするため、以下の検討を行った。

Ⅲ-①「健康である」と回答した学生の「健康観」について

「健康である」と回答した学生の「健康観」における単語出現頻度を見ると、「元気」「心」「病気」「健康」が上位にランクされている。これは全体的傾向とほぼ同様であると考えることができ、「生理的健康（生命的視点）」をベースとして健康を捉える傾向があることがわかる。しかし、「運動」「睡眠」といった「生活的健康（生活的視点）」に関わる単語の出現頻度は低く、「健康である」と自覚する学生達は、「健康観」において人間の心身の状態（内的環境）を重視した概念を持つ傾向にあることが明らかとなった。こうした傾向は、単語の重要度において「身体的」「病気」「ケガ」「元気」が高い値となっていることからもうかがえ、また、単語の係り受けかにおいても、「病気―かからない」「身体的―精神的」「元気―過ごせる」が高い得点となっていることから、これらも「生活的健康観」重視の傾向を裏付ける結果であると考えることができる。

Ⅲ-②「健康でない」と回答した学生の「健康観」について

「健康でない」と回答した学生の「健康観」における単語出現頻度を見ると、「「運動」「元気」「病気」「生活」「心身」「安定」「ご飯」「心」などの出現頻度が高く、ここから「生理的健康（生命的視点）」に関係する単語を除くと、「運動」「生活」「安定」「ご飯」が残ることとなり、これらの単語と関連する「生活的健康（生活的視点）」も重視している状況が明らかとなってくる。また、単語の係り受けにおいても、「ご飯―食べる」が最も高い数値となっており、「生理的健康（生命的視点）」と同時に「生活的健康（生活的視点）」が大切であると考える姿が示されている。

この様に、「健康でない」と自己評価する学生は「状態としての健康」から「過程としての健康」への概念移行が起こっていると考えられ、「健康」の自己評価においてもこうした基準を準用したため、回答においてネガティブな評価（「健康でない」）を誘導したと推察することが出来る。

Ⅲ-③「どちらでもない」と回答した学生の「健康観」について

「どちらでもない」と回答した学生の「健康観」における単語出現頻度を見ると、「心」「心身」「運動」「病気」「生活」早寝」「精神的」「早起き」の出現頻度が高くなっている。これらの単語は「生理的健康（生命的視点）」および「生活的健康（生活的視点）」に関係するものであるが、「健康である」「健康でない」のグループでの出現単語と比較すると、「早寝」「早起き」などの単語が入っていることから、多様で具体的な行動を基準に「健康」を評価する特徴が示されていると考えることができる。また、単語の係り受けにおいても、「適度―運動」が最も高い数値を示しており、「健康観」において「生活的健康（生活的視点）」を「生理的健康（生命的視点）」より重視する傾向があると類推することが可能である。

「どちらでもない」と自己健康評価した学生は、この様に自分の具体的な生活実態を見つめ直し、「運動」「睡眠」などのあるべき姿を基準として自身の健康評価を実施したため、健康である心身の状況と、完璧でない生活状況の狭間に陥り、ポジティブでもネガティブでもない回答（「どちらでもない」）となったと考えることができる。

Ⅲ-④「自己健康評価」の違う３グループの比較について

「自己健康評価」におて、「健康である」「健康でない」「どちらでもない」と回答したグループの「健康観」の特徴を比較すると、以下のような傾向があることがうかがえた。

「健康である」と評価するグループの「健康観」は、「生理的健康（生命的視点）」をベースとしている。このため、心身に特に問題がない場合、自分を「健康である」と評価する傾向にある。

「健康でない」と評価するグループの「健康観」は、「生理的健康（生命的視点）」と同時に「生活的健康（生活的視点）」基準に判断を行っている。このため、評価

基準が複数となり、厳しい基準を基に「健康ではない」と回答する傾向にある。

「どちらでもない」と評価するグループの「健康観」は、「生理的健康（生命的視点）」より「生活的健康（生活的視点）」を重視する特徴があり、正しい生活のあり方を優先する基準で判断を行ったため、自分自身での評価が難しくなり「どちらでもない」と応えている傾向がある。

「自己健康評価」は当然、調査時点での学生個々の現実の健康状態が判断の元となるが、回答に際しては、この状況をどのような尺度（健康観）で評価するかが重要な規定要因となっていると捉え、本研究ではこの視点からの考察を行った。

5. まとめ

本研究では、「保育内容・健康」を学ぼうとする学生の実態に応じた授業を実施するため、学生が「健康観」についてどのような認識を持っているか、自分自身の健康状態をどのように評価しているか（「自己健康評価」とした）、また、「健康観」「自己健康評価」の関係がどのようになっているかを知るため、自由記述によるアンケート調査を受講学生１０２名に実施し、「テキストマイニング」の手法により分析を行った。

その結果、以下のような点が明らかとなり、授業カリキュラム構築に向けての基礎資料を得ることができた。

１）学生の「健康観」は「生理的健康（生命的視点）」（病気でない心身の状態）と「生活的健康（生活的視点）」（生活を適正に行うことにより培われる力）をベースとしているが、「生存的健康観（人生的視点）」（環境保全行動を目指す態度）までには及んでいないことが明らかとなった。

２）自分自身が「健康である」と判断する学生の比率は59.9%であり、他の大学生の調査と比べて低く、「健康でない」が19.6%、「どちらともない」が23.5%であった。

３）「自己健康評価」において「健康である」と回答した学生の「健康観」は、「生理的健康（生命的視点）」をベースとしており、心身に特に問題がない場合、自分を「健康である」と評価している。

４）「自己健康評価」において「健康でない」と回答した学生の「健康観」は、「生理的健康（生命的視点）」と同時に「生活的健康（生活的視点）」をベースにしており、基準が複数となり「健康でない」とする厳しい評価をしている。

５）「自己健康評価」において「どちらでもない」と回答した学生の「健康観」は、「生理的健康（生命的視点）」より「生活的健康（生活的視点）」を重視する傾向にあり、正しい生活のあり方を優先した判断を基準としたため、評価が難しくなり「どちらでもない」と回答している。

６．引用文献・参考文献

１）甲斐一郎(2008)「健康観と健康感」日本健康医学会雑誌, Vol. 17-No. 2, p1.

２）野尻雅美(2003)「生態的健康観-２１世紀の健康観-」日本公衛誌, 第 50 巻-第 2 号, pp79-82.

３）杉本洋(2019)「健康観の変遷と展望」医学書院「医学会新聞」, 2019. 07. 29.

４）生田清美子(1996)「健康観に関する一考察」日本公衛誌, 第 43 巻-第 12 号, pp1005-1008.

５）立川昭二(2006)「日本人の健康観」人間ドック, Vol. 20-No. 5, pp26-30.

６）近藤義忠(1998)「日本人の健康意識と行動-「健康観」の歴史的展開-」仙台白百合女子大学紀要, Vol. 3, pp105-113.

７）木本沙紀・豊村恭子・山本善積(2014)「大学生の健康観と健康状況」山口大学教育学部研究論叢

（第３部）, Vol. 63, pp279-290.

８）小泉昌幸・上島慶(2016)「大学生の健康意識と行動に関する一考察」新潟工科大学研究紀要, 第 21 号, pp111-117.

９）藤澤邦彦・渡辺志津(2004)「大学生の健康意識と行動に関する調査研究」筑波大学体育科学系紀要, Vol. 27, pp81-89.

１０）藤永新子・原田江梨子・安森由美(2012)「看護大学生の健康の意識と対処行動の実態（第２報)」甲南女子大学研究紀要看護学リハビリテーション編, No. 6, pp69-76.

１１）今村貴幸(2017)「女子大学生における健康観と生活習慣に関する一考察」常盤大学保育学部紀要, No. 4, pp61-78.

１２）島本太香子・ハフシ メッド・田原武彦(2015)「大学生における主観的および健康度精神的健康度の分析-主観的健康度とストレス対処能の男女差および経時変化について-」奈良大学総合研究所報, 第 23 号, pp43-53.

１３）三浦正行(2003)「大学生の「健康像」を考える-「食への関心」をめぐっての一考察-」立命館経済学, 第 52 巻-第 5 号, pp359-379.

１４）兵頭圭介・鈴木明(2013)「大学生の健康に関する研究成果のレビューと課題」公益財団法人全国大学体育連合「大学体育」, No. 10, pp3-11.

ピアスーパーバイザーからのコメント

本論文は、今日の大学教育における〇〇に関する問題に注目されており、多くの教員が共有すべき知見であると思われます。中でも、〇〇については、これからの様々な教育活動の中で改善が求められる内容であると思われます。この知見が〇〇のような形で、より多くの先生にご理解いただけることを願っております。
（担当：甲陽園一郎）

第６類

コロナ禍における効果的なハイブリッド授業の試み

吉富　由佳子

YOSHITOMI Yukako

高等教育では、これまでもオンライン等の遠隔講義が推進されてきたが、2020 年のコロナ禍により、はからずも一気に加速されることとなった。当稿は、保育職志望の学生を対象として、オンラインと対面を併用したハイブリッド授業の実践とアンケートによる調査を行い、効果的なハイブリッド授業の論考を試みるものである。(1)オンライン授業はおおむね好評であるが、かえって対面授業の良さを実感した学生もいる、(2) オンライン授業や動画視聴の中でも、習熟度をアップさせることができた、(3) ICT を取り入れた教育は、機器やネットをスムーズに扱うことができれば学生の満足度も高いという結果が得られ、ハイブリッド授業や他の情報ツールの可能性と有効な利用の仕方について考察を行った。

キーワード：ハイブリッド授業、オンライン、zoom、グーグルフォーム

1.　はじめに

2019年末に中国にて確認された新型コロナウイルスによる感染症は世界中で感染拡大を続け、日常生活ではマスク着用や手指の消毒が当たり前となり大学での授業風景もオンライン化へ一挙に加速した。遠隔双方向通信システムとしては、以前よりSkypeなどのビデオ通話システムが存在したが、データ量の軽さや画面共有の簡便さなどからzoomが広く使われるようになっている。筆者は、「社会的養護Ⅰ」（全15コマ）を担当し、比較的初期の段階で緊急事態宣言が発出されたため、当初予定していた授業計画の変更を余儀なくされた。教員側も準備不足で、受講者は、ほぼ1年生で機器の操作に不慣れという状況下ではあったが、反対にこれを生かした授業設計ができないだろうか。

本稿では、オンラインと対面のハイブリッド授業を行うにあたり、大学でのICT教育の実践を試みることで学生自身がより主体的に学習をすすめられるような授業デザインを提案したい。まず、授業の方針を述べたあと、実際に取り入れたツールの具体的内容を紹介し、学生アンケートから得られた授業の学習成果及び課題と改善点を考察する。

2. 方　法

調査期間：2021年5月10日～6月28日

調査対象：保育職志望の短期大学生69名

調査方法：授業時間内に実施

2-1　授業方針

筆者が担当している「社会的養護Ⅰ」の社会的養護とは、保護者のない児童や、保護者に監護させることが適当でない児童を、公的責任で社会的に養育し、保護するとともに、養育に大きな困難を抱える家庭への支援を行うことである。 さらに「子どもの最善の利益のために」と「社会全体で子どもを育む」を理念として行われている。これらの基礎的な知識を半期15回の講義で習得することが目的であり、学生が目指す保育士が社会的養護の現場では多く配置されている。しかし、「措置」や「介入」などの通常聞きなれない言葉が多く使われており、高卒後間もない学生たちには教科書を読み込むことも難しいと思われた。また、予習を課しても個々で差がでることが予測されるため、学生全員が持参していることを確認したうえで、あらかじめピックアップした重要語句を授業時間内に携帯電話(スマホ)で検索させ、プリントに書き写させることとし

た。さらに児童養護施設や里親制度など、あまりなじみのない現場の雰囲気の理解を促すため、DVD教材なども用意していた。

第3回の授業直前に緊急事態宣言が発出され、第3回から対面授業とオンライン授業を併用するハイブリット授業を行うことが急遽決定した。そこで、当初の基本方針を崩さず、学生に最善の学習効果を上げてもらうために、ネット環境を生かした授業づくりに取り組むこととした。アンケート調査は、全面対面授業が決定してから2回目にあたる第11回の授業時に行った。オンライン授業は、zoomを利用した。

2-1　授業の具体的内容

授業では、主にプリントを使用した。プリントには、学んで欲しい重要語句を記載し、各自で調べて意味を書くように指示した。また、ミニレポートのテーマを記載し、次回授業時に回収することとした。オンライン参加が多くなることがわかってからは、youtube動画やグーグルフォームのURLを記載するようにして、プリントの枚数を減らすこととした。

オンライン配信で大学より使用するよう指示されたアプリケーションはzoomであり、学内でグーグルアカウントを教員も学生も取得済みであった。

授業の前週末には、zoom配信のIDとパスコードを知らせ、同時にプリントをダウンロードできるよう掲示板に掲載し、受講学生は事前に情報を得ることができた。

アンケートと社会的養護に関するミニクイズは、アンケートを簡便に作成、分析できるツールであるグーグルフォームを使い、無記名で特定できないとあらかじめ学生には伝えた。

密にならず、意見交換ができるzoomのブレイクアウトルーム機能を一度使用した。

DVDを遠隔で視聴させることは著作権の侵害にあたるため、視聴はyoutube動画に統一した。

3.結　果

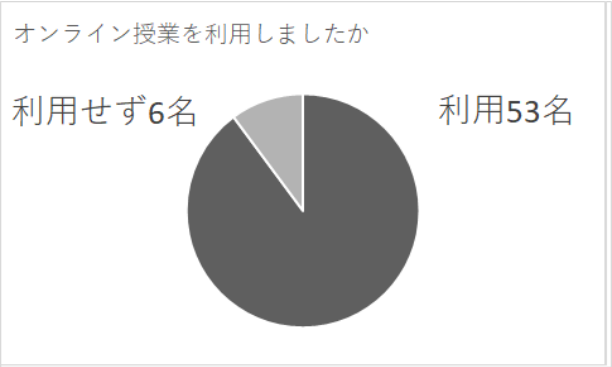
3-1　全体アンケート結果

グーグルフォームを用いたアンケートでは、59名の回答が得られた。うち26名はグーグルフォームに入れなかったため、紙での回答であった。

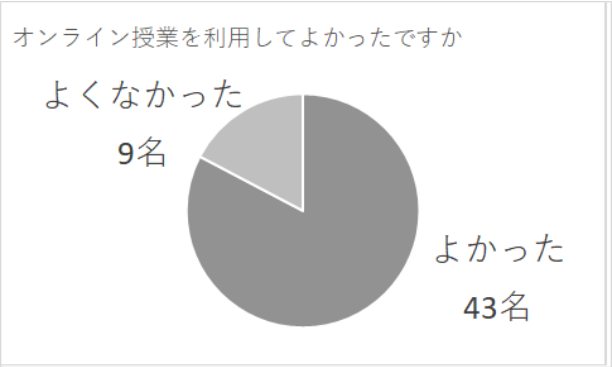
質問項目は以下の通りである。

1.オンライン授業を利用しましたか
2.オンライン授業を利用した人にお聞きします。オ4ンライン授業を利用してよかったですか
3.　2.の理由を教えてください
4.オンライン授業で困ったことはなんですか
5.オンライン授業を使わなかった人にお聞きします。使わなくてよかったと思いますか
6.オンラインを使わなかった理由を教えてください
7.皆さんにお聞きします。同じ時間帯にオンライン授業と対面授業のどちらもすることはどう思いますか。
8.　7で答えた理由を教えてください
9.　こうしてほしかったなど、オンライン授業について何でもよいので、書いてください
10.この授業では、オンラインやこのアンケートのようなグーグルフォーム、youtubeなどを使いましたが、どう思いますか。

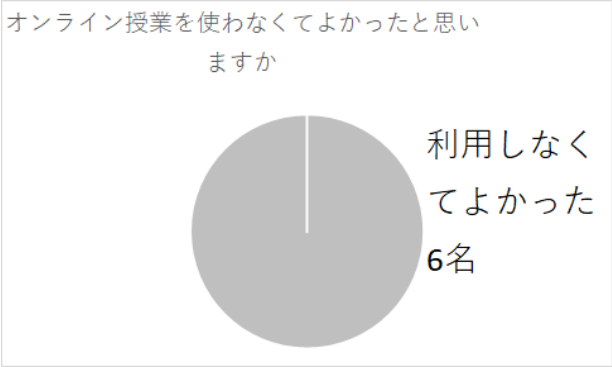
59名のうち、オンライン授業を利用した学生は53名で約9割を占めた。



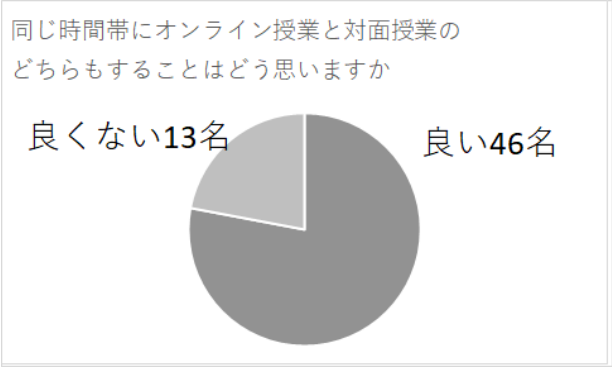
オンライン授業を利用した学生のうち、「よかった」と回答したのは、43名(82.7%)であった。



オンライン授業を利用しなかった学生6名のうち全員が利用しなくて良かったと回答していた。



対面とオンラインの併用授業については、78%の学生が「良い」と答えた。



自由回答では、オンライン授業利用者は感染リスクへの不安の軽減という本来の目的以外に「通学時間を他の時間に使える」「ひとりで集中できた」「共有画面をしっかりと確認できた」「教員の声が聞き取りやすかった」と、おおむね好評であった反面「動画の音声が聞きにくい」「資料印刷をするのが大変」などの声があった。オンライン授業を利用しなかった学生からは、ネット環境や機器のトラブルへの不安が訴えられ、「対面のほうが集中できる」との声もあった。その中で、ハイブリッド授業について「良い」と答えた学生は「それぞれの受けやすい環境で受けられる、より良い方法を選択することが出来る」などの回答があった。「良くない」と答えた学生の選択理由としてオンライン利用者は「対面の方に話されている時間何をしたらいいか分からない状況だった」と答え、一方で対面授業を選んだ学生は「オンラインの人のことを気にして授業が進まない」という不満の声が得られた。

3-2　社会的養護に関する習熟度

以下の内容でクイズを行った。

1.保育士が園児を無視。これって児童虐待?
2.児童養護施設では自室を持てない？
3.小さいときに虐待されていた人は、自分が嫌だった経験があるので、虐待をする人は少ない？
4.学びたいという気持ちさえあれば、奨学金は無条件で借りられる？
5.児童養護施設にいったん入所すると18歳にならないと退所できない？
6.措置には次の二つの意味がありますが、福祉でよく使われる意味はどちら?
7.児童養護施設の中では、常に職員が気を配っているので、子ども同士の暴力はほとんどない？
8.児童生徒にわいせつ行為をした教員は、もう教員に戻れない?
9.母子生活支援施設には「措置制度」が適用されない？
10.両親のわからない乳児の名前をつけるのは誰?
11.次の文は、「社会的養護の課題と将来像」（児童養護施設等の社会的養護の課題に関する検討委員会・社会保障審議会児童部会社会的養護専門委員会）（平成23年7月）における「社会的養護の理念と機能」の一部である。（A）～（D）にあてはまる語句の正しい組み合わせを一つ選びなさい。社会的養護は、保護者のない児童や、保護者に（A）させることが適当でない児童を、公的責任で社会的に養育し、保護するとともに、養育に大きな困難を抱える家庭への支援を行うことである。社会的養護は、「子どもの（B）のために」という考え方と、「（C）で子どもを育む」という考え方を理念とし、保護者の適切な養育を受けられない子どもを、社会の公的責任で保護養育し、子どもが（D）基本的な権利を保障する。
①A 監護 B 基本的人権の保障 C 地域　D 安全で安心して暮らせる
②A 養護 B 最善の利益 C 地域　D 心身ともに健康に育つ
③A 監護 B 最善の利益 C 社会全体　D 心身ともに健康に育つ
④A 養護　B 基本的人権の保障 C 社会全体 D 安全で安心して暮らせる
⑤A 監護　B 最善の利益 C 社会全体 D 安全で安心して暮らせる

(解説

1.児童虐待は保護者が監護する児童（18歳未満）を虐待することと定義されているので、正答は「児童虐待といえない」が正しい。

2.個室がもてる児童養護施設もあり、いろいろな観点から推進されてきている。

3.必ずしも、そうなると言い切れないことを押さえた上で、被虐待児が虐待する保護者になるケースは少なくない。

4.児童養護施設出身者を対象とした民間財団の奨学金制度なども増えつつあるが、無条件に貸付というわけではない。

5.児童養護施設で暮らす子どもが元の家庭に戻ることを家族再統合といい、個々のケースによって異なるため、必ず18歳まで児童養護施設で暮らさなければならないわけではない。

6.「措置」という言葉は日常ではあまり使われないが、福祉で使われるのは「事態に応じて必要な手続きをとること。取り計らって始末をつけること。処置。」の意。

7.児童養護施設内での子ども間の暴力は少なくない。特に性暴力においては、2011年、施設に預けられていた女児が同じ施設で暮らす男子中学生から、わいせつな行為を繰り返し受けたことが発覚したのをきっかけに、厚生労働省が実態調査を行った。2017年に全国の児童養護施設や里親家庭などで起きている子ども間で生じる問題に関わった子どもの実人数は約1000名に上ることが明らかとなった。

8.直接、社会的養護とは関係ないが、5/28に「教員による性暴力防止法」が成立したばかりでタイムリーだったので入れた。これまでは、懲戒免職になり教員免許を失効後3年たってから申請すれば自動的に再交付を受けられるという状況であった。今回、再交付を拒否できる権限を都道府県教育委員会に与えられたが、教員にまったく戻れないわけではない。

9.2の関連問題。社会的養護に関する制度の母子生活支援施設を除いた主たる部分に「措置制度」が残されることとなった。

10.戸籍法第57条2項によると棄児に対し「市町村長は、氏名をつけ」とあるが、実際には都道府県知事であることも多い。

11.過去の保育士資格試験からの問題。社会的養護は、保護者のない児童や、保護者に監護させることが適当でない児童を公的責任で社会的に養育し、保護するとともに、養育に大きな困難を抱える家庭への支援を行うことである。社会的養護は、「子どもの最善の利益のために」という考え方と、「社会全体で子どもを育む」という考え方を理念とし、保護者の適切な養育を受けられない子どもを、社会の公的責任で保護養育し、子どもが心身ともに健康に育つ基本的な権利を保障する。)

1回目はオンライン授業出席が大半であった5/31に、2回目は全面対面授業に戻った6/28に、同じ問題で無記名で実施した。1回目の解答後には説明を加えて正答を示し、後日、同じクイズを実施することは伝えなかった。集計したものをリアルタイムで学生に見せたかったので、グーグルフォームを読み込めた者のみの解答となった。以下が学生の正答率であり、正答率が上がった問題は11問中8問であった。

問題番号	1回目正答率 38名回答	2回目正答率 22名回答	正答率が上がった問題
1	15.8%	50%	○
2	28.9%	77.3%	○
3	65.8%	100%	○
4	86.8%	77.3%	
5	94.7%	90.9%	
6	89.5%	81.8%	
7	76.3%	100%	○
8	28.9%	54.5%	○
9	21.1%	22.7%	○
10	2.6%	22.7%	○
11	21.1%	36.4%	○

3-3　グーグルフォームやYoutube動画などを利用した授業の感想

グーグルフォームは読み込めないという不満が大多数であったが、スムーズに読み込めた学生からは「答えやすいのでプリントに書くより良い」「アンケートは他の人の回答が見られる」という意見があった。また、Youtube動画視聴は、音声が聞き取りにくいというシステム上の課題は指摘されたが、「実際に経験した人の話を聞くのでとても良い」「(URLを知っていれば)また見返すことができるのでよい」という意見があった。zoomのブレイクアウトルーム機能についての感想は1件のみであったが「対面じゃないのでほぼ知らない人と話すのが緊張した」ということであった。

上記のことから、

(1)オンライン授業はおおむね好評であるが、かえって対面授業の良さを実感した学生もいる、(2) オンライン授業や動画視聴の中でも、習熟度をアップさせることができた、(3) ICTを取り入れた教育は、機器やネ

ットをスムーズに扱うことができれば学生の満足度も高いという結果が得られた。

4．考　察

今回は、教員も学生もあまり準備できないままハイブリッド授業に突入してしまった。今年度から授業を担当したとはいえ、実際にはコロナ禍により昨年度から遠隔授業が加速することは予測できたのだから、もう少し準備したり、対面授業のうちに学生に機器に習熟させたりすればよかったと考える。特に、受講学生はほぼ1年生であり、携帯電話やパソコンの使い方が限定され、パスワードを忘れる、zoomで音声が聞こえないといった受け取り側の問題であるトラブルが多く発生した。しかし、慣れないながらも、オンライン授業は好意的に受け止められていたようである。本来は新型コロナ感染を恐れ、対面授業に不安を感じる学生のための対応ではあるが、「通学時間がなくなり、他に時間を使える」「集中できた」「質問しやすい」などのメリットを学生は感じていたようであった。

一方、少数ながら対面のみを選んだ学生は、全員が対面授業でよかったと回答した。その理由として、「対面に来ている人が少ないと授業に集中しやすい」などの意見に代表されるように、受講人数が少なくなってゆったりと授業を受けられたからと推察する。もともと70名弱の受講生が出席し、透明なパーテーションを張り巡らせた空間は、閉塞感を感じさせる。対面受講生が少ないときは、意見をシェアする際もリラックスしており活発な意見や質問が相次いだが、いざ全員の対面授業が再開されたときは、また学生の間に消極的な雰囲気が漂った。藤原ら(2021)は、特に新入生に対して対面でのコミュニケーションの場を設定する必要がある、と述べているが入学したばかりの学生には特に配慮すべきだろう。

ハイブリッド授業だからこそ、接触せず意見をシェアしやすいと考え、オンライン学生には、zoomのブレイクアウトルームでランダムにグループ分けをして、自己紹介から始めるように促したが、どうしてよいかわからない学生が大半で、うまく機能しなかった。効果的に活用するためには、あらかじめ対面時にしっかりと演習する必要がある。特に、対人援助職の研修は、単に講義を聞くだけでなく、初対面の受講生とグループになって話し合ったり、プレゼンテーションを行ったりするものが多い。社会人になると、職場の代表として研修に出る機会もあるだろう。その時に困らないようなスキルをしっかりと身につけるためにもオンライン授業を活用することを今後試みたいと考える。

当講義ではテストを実施せずミニレポートで評価するため、全体の習熟度データはグーグルフォームを活用した。グーグルフォームのよい点は、挙手と違って誰がどの回答をしたかわからなくできる上、すぐにグラフ化できるので、自分の解答と照らし合わせられることだ。教員側も受講生の理解度を確認しながら、どの問題を重点的に解説したらよいか対応できるのがメリットだ。グーグルフォームは教員と学生双方が負担なく取り組める効果的なツールであったが、読み込めない学生が続出した。特に全員対面授業時には、出席人数の半数以下の22名しか読み込めなかった。オンライン出席が大半だったときのグーグルフォーム参加数は38名であったから、自宅のパソコンにしかアカウント設定していないのではと考えられるが、ひとりひとりの事情を聞いていないので原因はわからない。このように、ICT教育は、たどりついたあとは、個人のペースで負担少なく進められるが、至るまでの接続や設定が面倒である。また、学生によって情報リテラシーの違いがあり、どこまで教員側がフォローするべきか悩ましい。情報リテラシーの高い学生に手伝ってもらうなど何らかの工夫が必要で、設定から授業設計、実施、フォローまでをひとりの教員がスムーズにこなすことは至難の業だ。実際、筆者も対面の学生とオンラインの学生のどちらも待たせないことに腐心したものの、不満の声は上がっており、対面授業とオンライン授業を同時並行するハイブリッド授業はかえって難しいと感じた。学生からは「一緒にするほうが先生も楽だと思う」と教員を気遣った意見もあったが、筆者は心理士という職種柄、双方向コミュニケーションを目指していたのでどちらの側にも配慮しなければならず、よほど上手に授業設計をしないとどちら側にも満足を与えることはできないと感じた。

習熟度に関しては、あえて覚えることを強制しなかったにもかかわらず11問中8問の正答率が上がり、当初の目標はおおむね達成できた。単なる講義だけでなく、視聴覚教材によって、学生に印象付けられた効果は大きい。特に、虐待の世代間連鎖に関わる問題と児童養護施設内の子ども間暴力の問題は特に筆者が伝えたい実情であったので100%の正答率が得られたことはうれしい限りだ。

視聴覚教材の不満は、音声が聞きづらいといったハード面でのものが大半であった。オンライン出席の学生には動画を見られるURLを配信したが、QRコードに変換して掲載するなど、よりアクセスのしやすい工夫が必要であった。内容に関しては、著作権の関係からDVDではなく誰でも見られるyoutube動画にせざるをえなかったのだが、結果的に功を奏した。なぜなら、DVDはよくまとまっているのだが、古いものや若者がとっつきにくいものが多いからだ。すでに社会的養護に関するyoutubeチャンネルは複数存在し、学生より多少年上の発信者が今の言葉で語りかけていた。こうした内容にほとんどの学生が「わかりやすい」と答え、ミニレポートにも身近な問題ととらえ表現できていた。

コロナ禍がきっかけではあったが、オンライン及びハイブリッド授業は、今後さらに一般的になるであろう。講義形式で視聴者側からの働きかけがコントロールできるので、オンライン配信は多人数が一度に視聴しても安全性が保てる。だが、大学など所属意識が高い集団でオンライン授業をするのであれば、その場の雰囲気や他者の意見、時にはハプニングなども共有できることが重要なのではないかと考える。この時代の大学生は孤独感を感じている。通学時間の短縮などオンライン授業のメリットも実感したうえで、他者とのつながりを欲している心情が伝わってくる。授業時間を分割して入れる出席者人数を制限したり、zoomのブレイクアウトルーム機能を活用するなど、オンラインだからこそ、少人数で受講しているような工夫が必要なのではないかと考える。ネット環境の不安定さ等ハード面の課題が解消でき、学生ひとりひとりが教員や他の学生とつながっている感覚をもてることがハイブリッド授業のめざすべき道ではないかと考える。

5. 引用文献・参考文献

厚生労働省報道発表資料（1999）社会福祉基礎構造改革について（社会福祉事業法等改正法案大綱骨子）

みずほ情報総研株式会社(2019)児童養護施設等において子ども間で発生する性的な問題等に関する調査研究報告書

久保田まり（2010）児童虐待における世代間連鎖の問題と援助的介入の方略：発達臨床心理学的視点から　季刊・社会保障研究　第４５巻　第４号

山下　功（2021）遠隔授業の実施事例と授業改善　新潟国際情報大学経営情報学部紀要　第4号

西山　茂（2021）遠隔授業の経験的考察　新潟国際情報大学経営情報学部紀要　第4号

藤原俊幸　他（2021）遠隔教育の実施と大学での教育に関する一考察―建学の精神を伝える授業のオンラインでの実施をもとに―　長崎国際大学教育基盤センター紀要　第4巻

ピアスーパーバイザーからのコメント

本論文はオンラインと対面のハイブリッド授業を行うにあたって学生の主体的な学びを深めるための試みを実践、また情報ツールの可能性について考察され、これは今後の教育活動の中で模索、改善が求められる内容であると思われます。今後一層ハイブリッド授業のような授業体制が一般的になることが予想される中で、特に座学だけでなく演習科目においても同時性を保ちながら授業を進めてくことは重要な課題となると考えられ、本実践報告の知見がより多くの先生方に共有されることを願っております。

（担当：辻本　恵）

第６類

保育実習における身体表現遊びの実態及び受講生の身体表現遊びに対する意識
－保育者養成校における「身体表現Ⅰ」の受講生を対象として－

川野　裕姫子　　橘　未都　　青木宏樹

KAWANO YUKIKO　　TACHIBANA MISATO　　AOKI HIROKI

保育実習における身体表現遊びの実態及び身体表現の授業が受講生の身体表現遊びの必要性の意識に対する影響を検討することを目的として、本研究ではアンケート調査を実施し評価した。

調査から、半数近くの実習園(所)が身体表現遊びを実施していなかったが、設定保育実習では多くの受講生が領域「表現」を実施していることが明らかとなった。表現の中でも造形を選択した受講生が半数以上を占め、身体表現は３割程度であり、ごっこ遊びや手遊びなどが多く取り入れられていた。また、受講後、殆どの受講生が乳幼児期の身体表現遊びは必要であると意識していることが明らかとなり、授業の重要性が判断された。本研究においての身体表現の分野に着目し得られた知見は、保育者を目指す受講生が、身体表現遊びを通して子どものこころとからだを育み、感性豊かな自己表現が出来るように導くための手立てとしての貴重な知見をもたらすことができた。

キーワード：保育者養成校、乳幼児、身体表現活動（遊び）、設定保育実習

1.　はじめに

幼児の発達において、家族とコミュニケーションを取ること、友だちと遊ぶなど他者と関わる機会を持つこと、そして自己の表現(身体表現等)等の経験は不可欠である。これまでの研究から、十分に他者と関わり、身体表現活動(遊び)を通して自己を表現する機会の得られなかった幼児は、考えを上手く表現することが苦手であったり、人の立場に立って物事を考えたりできない子どもに成長してしまう可能性が示されている。また、物事に対して受け身的で、自分の思いをうまく表現できず友だちとトラブルになってしまった事例も報告されている [1)]。しかし、少子化や核家族化、共働き家庭の増加に伴い、幼児が家庭において、家族や他者と触れ合う時間は減少している。一方で、保育施設などで一日の大半を過ごす幼児は増加している。乳幼児の発達時期の大半を保育施設で過ごすということは、保育施設は幼児の発達に大きな影響を与える可能性がある。そのため、コミュニ―ションの場や身体表現活動の場を通して自己表現をする環境を保育者は幼児に与えることが必要である。保育施設において、集団生活をすることで自然と他者と関わる機会は得られるが、身体表現活動(遊び)は保育者が意図して取り入れなければ、幼児は経験することが出来ない。

青山ら [2)]は、特に乳幼児期は心と身体を密接に結びつけて自己を表現し、全面的発達を遂げていく時期であると説明している。そして「表現遊び」は、身体を通して考察力や創造性を養い、社会的発達においても互いに共感し合い、コミュニケーション能力を高めると共に、心の発達にも重要な要素が含まれていると述べている。長野 [3)]は、幼稚園教育要領や保育所保育指針における「表

現」の領域は、芸術(音楽、絵画、創作等)活動ならびに身体表現活動で構成され、一般的には、「創作ダンス」や「リズムダンス」など舞踊の要素を含んだ身体表現であると説いている。また、近年の子どもたちの豊かな感性や表現力を育むためには、「からだを使ったあそびを伴う自己表現や他者とのコミュニケーション等の精神活動を促し、言葉の発達ならびに健やかなこころとからだをバランスよく育む活動」と捉えた身体表現活動(遊び)が重要であると指摘している[3]。これらのことは、保育施設において乳幼児に身体表現の機会を多く提供し、子どもの豊かな表現力を引き出し、一人ひとりが表現する楽しさを実感できる指導・援助を行うことの重要性を明らかにした。つまり、保育者においても保育者自身が感性を研き、表現力を豊かにすると共に十分な知識や経験を育むことの必要性が示されている。

しかし、現行の身体表現活動(遊び)の実施には課題がある。実際の保育現場の保育者や保育養成校の学生は、身体表現に対する自分自身の経験不足や苦手(不得意)意識を理由に[4-7]、身体表現遊びにおける指導の困難さを訴えている[8,9]。そのため、保育現場での身体表現遊びは、「手遊び」や「歌や曲に合わせての踊り」を取り入れることが多く、からだの動きをベースにした創作的身体表現(遊び)は十分に実施されていないと述べている[4]。また、保育養成校の学生よる幼稚園実習時の表現活動の実態調査においても、既成作品(型のある身体表現)のダンスや体操などの実施数が一番多く、ピアノに合わせての自由な創作身体活動(型のない身体表現)の実施数は少数である[10]。また、林[11]の保育実習時の活動の実態調査を実施した報告によると、10 日間の保育園実習において部分保育活動内容に学生が取り入れた活動は「絵本」が最も多く、続いて「ゲーム」「運動遊び」「制作」であった。身体表現である「手遊び」や「リズム遊び」は1回ずつしか取り入れられていなかった。先行研究において[7]、身体表現の受講生を対象に、授業内容である自己の表現力や理解度の調査を実施したところ、「手遊び」、「歌遊び」及び「既成的なダンス(型のある身体表現)」は好んで積極的に活動する、創作的身体表現遊び(型のない身体表現)に関しては、苦手意識を持つ学生が半分程度いることが明らかとなった。このことは学生自身の身体表現、特に創作的身体表現に対する自信の無さを示した。

創作的身体表現に対する苦手意識を持ったまま保育者として、従事することは表現の機会を幼児に提供できない可能性が高くなる。そのため、保育現場で求められている保育者のあり方を理解し、上述の長野[3]が理想とする身体表現活動を提供するためには、在学時に幼児の年齢に応じた身体表現能力や身体表現そのものの重要性を理解し多くの経験を積むことが必要である。また、設定保育実習を経験する際も、先ずは型のある身体表現遊びから取り入れ、幼児と共に楽しむことを学び、徐々に創作的身体表現遊びを取り入れ、段階的に経験を積む機会を保育者を目指す学生は得るべきである。しかし、身体表現活動(遊び)の妨げとなる苦手意識の要因や保育者を目指す学生が乳幼児期の身体表現の必要性を認識しているかは明らかでない。苦手意識の要因や学生の身体表現遊びに対する認識を明らかにすることで、保育者を目指す学生の身体表現に関する現状の意識を把握した授業の展開ができる。また、本来求められている子どもの内面にある欲求、感性、感情を表出させ、身体活動を介して体力や身体能力の基礎を培うような授業を提供することができる。今後学生が保育実習時の活動や将来の保育現場において様々な創作活動を展開する意欲が湧き、積極的に身体表現を取り入れることで保育実践力を向上させ幼児の発達に貢献することが出来ると考える。

以上のことから、本研究では、保育実習における身体表現活動(遊び)の実態を調査し、身体表現(ダンス)経験の有無は身体表現遊びの実施に与える影響、および身体表現の授業が受講生の身体表現遊びの必要性の意識に対する影響を検討することを目的とする。

2. 方　法

調査対象者

K 短期大学(保育者養成校)における身体表現Ⅰを 2020 年度に受講した長期履修制 2 回生の計 79 名(男性 3 名、女性 76 名)を対象とした。有効回答 学生 76 名(男性 3 名、女性 73 名) (回収率 96.2%)を解析に利用した。アンケート実施にあたって、事前に研究の趣旨を十分に説明し同意を得た。

本研究の対象となった保育者養成校は、2 年制と長期履修制(3 年制)課程が設定されており、長期履修制在籍の学生は、2 年制のカリキュラムを 3 年間で履修することとなっている。

対象学生は、調査の時点において 1 年次の 9 月に保育実習ⅠB、1 年次の 2 月に保育実習ⅠA を終了している。9 月の保育実習ⅠB では施設にて実習を行い、2 月実施の保育実習ⅠA では保育園(所)にて実習を行った。

アンケート調査

アンケート調査では、保育実習時における身体表現活動(遊び)(以後、「身体表現活動(遊び)」を「身体表現遊び」とする)に係る実態調査と(参考資料Ⅰ-1)、個々の中等教育機関における身体表現経験および身体表現遊びに対する意識調査(参考資料１-2)の 2 種を二回に分けて実施した。

保育実習時における身体表現遊びに係る実態調査では、保育実習時における実習園の身体表現遊びの実施の有無、設定保育実習時の領域「表現」の実施の有無、設定保育実習時に実施した分野の選択内容、身体表現遊びの実施内容を調査した。本アンケートは 2 月実施の保育実習ⅠA を対象とし、2020 年度後期の身体表現Ⅰの授業開始時に実施した。

個々の中等教育機関における身体表現経験および身体表現遊びに対する意識調査では、中等教育機関での身体表現(ダンス)（以後、身体表現(ダンス)を「身体表現」とする）の経験の有無と、乳幼児期における身体表現遊びに対する認識度および今後取り入れたい身体表現遊びの内容をアンケートにて調査した。本アンケートは、2020 年度後期の身体表現Ⅰの 15 回目の授業終了時に実施した。

統計解析

保育実習における身体表現遊びに係る偏りおよび、学生の身体表現経験、身体表現遊びに対する認識の偏りを検討するために適合度の検定(x^2 検定)を行い統計処理を実施した。有意水準は 5%未満とした。

用語の定義

本研究において使用する用語を以下の通り定義する。

身体表現遊び

「型のあるダンス」と「型のないダンス」を含む，乳幼児が身体をつかって表現する遊びとした。「型のあるダンス」は構造化され，振り付けや構成があらかじめ決められたダンスであり、既成ダンス・リズムダンス・伝承的郷土的遊戯・手遊び・歌遊び・発表会ダンス・フォークダンスを意味する。「型のないダンス」は探索的・創造的であり、振り付けは決まっておらず即興的に動いたりするダンスであり、模倣遊び・リズム表現・ごっこ遊び・即興的ダンス・身近なものを使った表現遊び・創作身体表現遊び・劇遊びを意味する [12]。

保育実習

保育者養成校で習う教科全体の知識や技能を基礎とし、総合的に実践する応用力を養うために、児童に対する理解を通じて保育の理論と実践の関係について習熟させることを目的とする科目とする [13,14]。

設定保育実習

部分保育、半日保育、全日保育を含み学生自身が責任をもって保育活動をすることとする。

3. 結　果

実習園（所)の身体表現遊び実施状況

学生(以下受講生)が保育実習に参加した実習園において、身体表現遊びの実施状況を調査したところ，実習園の 41 園が身体表現遊びを実施し、35 園が身体表現遊びを実施していなかった(図 1)。適合度の検定(x^2 検定)を行った結果、有意な差が認められなかった(x^2=0.474)。

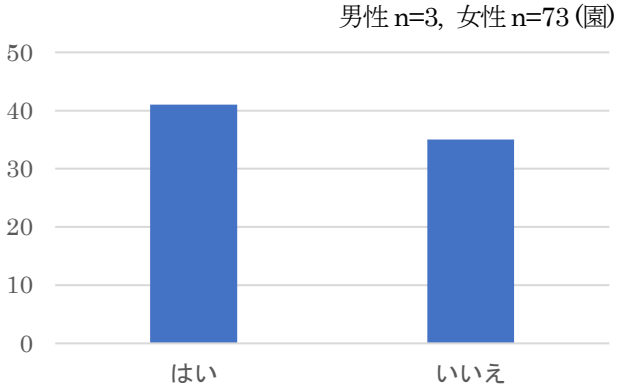


図１．実習園における
身体表現遊び実施の有無の回答度数(割合)

設定保育実習の実施状況

設定保育実習における領域「表現」の実施状況を調査したところ、53 名の受講生が領域「表現」を実施し、23 名の受講生が領域「表現」を実施していなかった(図 2)。適合度の検定(x^2 検定)を行った結果、有意な差が認められた(x^2=11.842)。

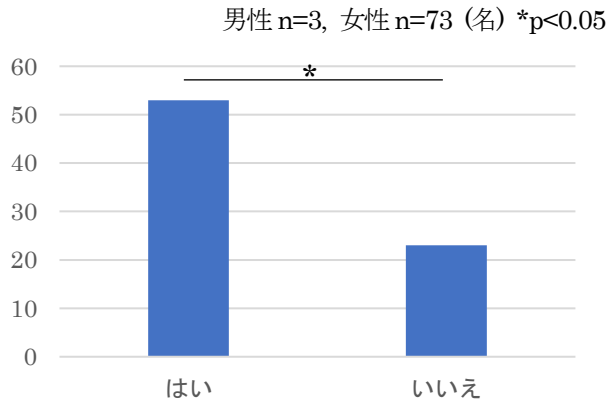


図２．設定保育実習における領域「表現」の実施状況

設定保育実習に領域「表現」を実施した 53 名の受講生を対象に実施分野を調査したところ、32 名が「造形」、

17 名が「身体表現」、4 名が「音楽」を実施していた(図 3)。適合度の検定(x^2 検定)を行った結果、有意な差が認められた(x^2=22.185)。多重比較検定の結果、音楽を実施した受講生が，造形および身体表現を実施した受講生より有意に少なかった。

男性 n=3，女性 n=50 (名) *p<0.05

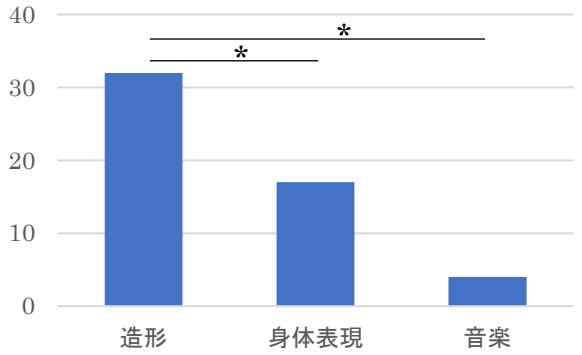


図 3．設定保育実習における領域「表現」の実施分野

設定保育実習時に「身体表現」を実施した 17 名の受講生を対象に実施内容を調査したところ(複数回答可)、15 名の受講者が「型のあるダンス」を実施し、17 名の受講者全員が「型のないダンス」を実施していた。実施内容の内訳は以下の通りであった(図 4)。「型のあるダンス」では、既成ダンス 1 名、リズムダンス 3 名、伝承的郷土的遊戯 1 名、手遊び 9 名、歌遊び 1 名であった。「型のないダンス」では、模倣遊び 1 名、リズム表現 1 名、ごっこ遊び 11 名、身近なものを使った表現遊び 2 名、創作身体表現遊び 2 名であった。

男性 n=1，女性 n=16 (名)

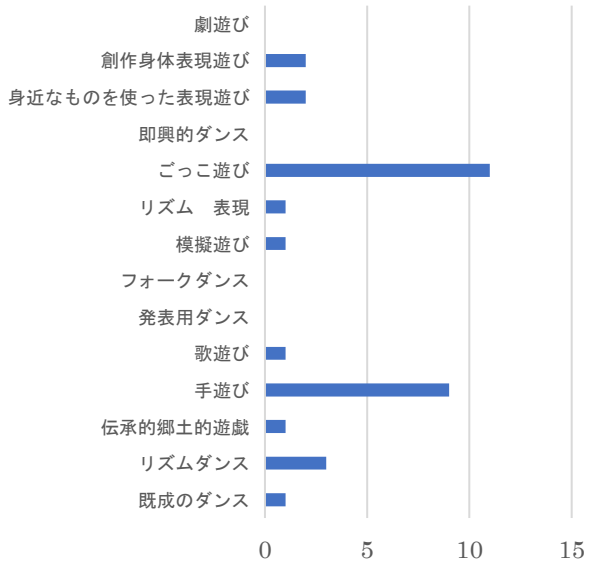


図 4．設定保育実習時に身体表現遊びを実施した受講生における実施内容

中等教育機関における身体表現(ダンス)の経験

中等教育機関における受講生の身体表現経験を調査したところ、中学校と高等学校にて身体表現を経験した受講生は 47 名、中学校のみで経験した受講生は 20 名、高等学校のみで経験した受講生は 7 名、全く経験したことがない受講生は 2 名であった(図 5)。適合度の検定(x^2 検定)を行った結果、有意な差が認められた(x^2=64.105)。多重比較の結果、中等教育機関で経験した受講生の数は、中学校或いは高等学校のみで経験した受講生の数および全く経験していない受講生の数より多かった。また、中学校のみで経験した受講生は全く経験していない受講生より多かった。

男性 n=3，女性 n=73 (名) *p<0.05

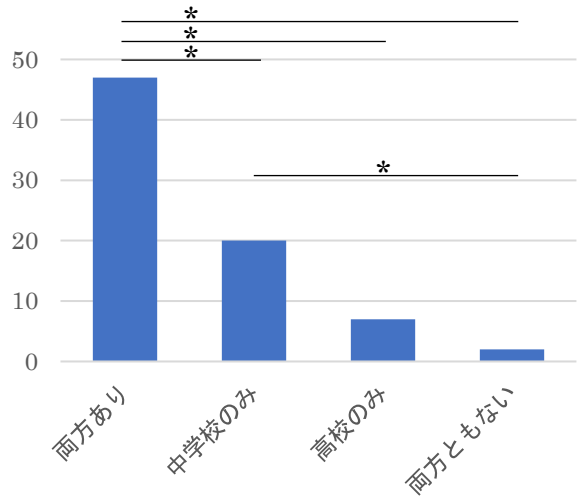


図 5．中等教育機関における受講生の身体表現(ダンス)経験

乳幼児期における身体表現遊びに対する意識度

乳幼児期における身体表現遊びに対する意識度を調査したところ、「とても思う」と回答した受講生は 50 名、「まあ思う」と回答した受講生は 25 名、「あまり思わない」と回答した受講生は 1 名、「全く思わない」0 名であった(図 6)。適合度の検定(x^2 検定)を行った結果、有意な偏りが認められた(x^2=88.526)。多重比較検定の結果、「とても思う」と回答した受講生の数は、「まあ思う」と回答した受講生の数より多く、「あまり思わない」と回答した受講生の数および「まったく思わない」と回答した受講生の数より多かった。

男性 n=3, 女性 n=73 (名) *p<0.05

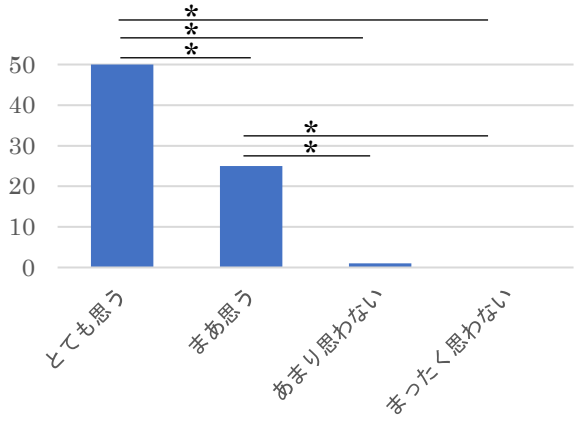


図６．乳幼児期における身体表現遊びに対する意識度

今後実施したい身体表現遊びの内容

乳幼児期における身体表現遊びに対する認識度の調査で、「とても思う」と「まあ思う」と回答した受講生 75 名を対象に、今後実施したい身体表現遊びの内容を調査したところ(複数回答可) 149 名の受講者が「型のあるダンス」を実施し、97 名の受講者が「型のないダンス」を実施していた。実施内容の内訳は以下の通りであった(図7). 「型のあるダンス」では、既成ダンス 17 名、リズムダンス 36 名、伝承的郷土的遊戯 24 名、手遊び 32 名、歌遊び 24 名、発表用ダンス 11 名、フォークダンス 5 名であった。「型のないダンス」では、模倣遊び 10 名、リズム表現 20 名、ごっこ遊び 26 名、即興的ダンス 4 名、身近なものを使った表現遊び 24 名、創作身体表現遊び 6 名、劇遊び 7 名であった。

男性 n=3, 女性 n=72 (名)

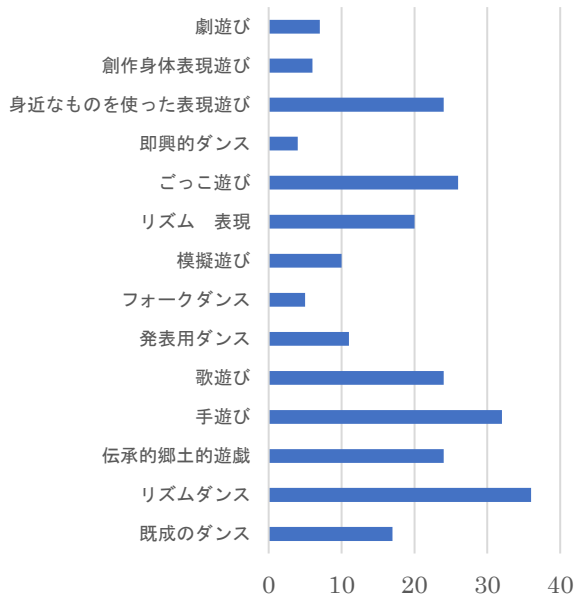


図７．今後実施したい身体表現遊びの内容

実習園の身体表現遊び実施の有無と受講生による設定保育実習の選択内容の関係

実習園での身体表現遊び実施の有無が、受講生による設定保育実習時の内容選択に与える影響を評価した結果を図 8 に示す。実習園が身体表現遊びを実施していたと回答した 41 名の受講生のうち、18 名が「造形」、11 名が「身体表現」、2 名が「音楽」を実施し、10 名が領域「表現」を実施していなかった。実習園が身体表現遊びを実施していなかったと回答した 35 名の受講生のうち、自身の設定保育実習においては 14 名が「造形」、6 名が「身体表現」、2 名が「音楽」を実施し、13 名が領域「表現」を実施していなかった。

男性 n=3, 女性 n=73 (名(%))

		身体表現	音楽	造形	活用なし	
実習園の身体表現遊び	はい	11 (26.8)	2 (4.9)	18 (43.9)	41 (24.2)	41 (53.9)
	いいえ	6 (17.1)	2 (5.7)	14 (40.0)	13 (37.2)	35 (53.9)
		17 (22.4)	4 (5.3)	32 (42.0)	23 (30.3)	

図８．実習園の身体表現遊び実施の有無と受講生による設定保育実習の選択内容の関係

受講生の身体表現(ダンス)の経験と受講生による設定保育実習の選択内容の関係

受講生の身体表現の経験が、受講生による設定保育実習時の内容選択に与える影響を評価した結果を図 9 に示す。中等教育機関で身体表現を経験したと回答した 47 名の受講生のうち、23 名が「造形」、6 名が「身体表現」、3 名が「音楽」を実施し、15 名が領域「表現」を実施していなかった。中学校のみで身体表現を経験したと回答した 20 名の受講生のうち、7 名が「造形」、8 名が「身体表現」、1 名が「音楽」を実施し、4 名が領域「表現」を実施していなかった。高等学校のみで身体表現を経験したと回答した 7 名の受講生のうち、2 名が「造形」、2 名が「身体表現」、0 名が「音楽」を実施し、3 名が領域「表現」を実施していなかった。中等教育機関で身体表現を経験していないと回答した 2 名は、1 名が「身体表現」を実施し、1 名は領域「表現」を実施していなかった。

男性 n=3, 女性 n=73 (名(%))

	身体表現	音楽	造形	活用無し	
両方（中・高）	6 (12.8)	3 (6.4)	23 (48.9)	15 (31.9)	47 (61.9)
中学校のみ	8 (40.0)	1 (5.0)	7 (35.0)	4 (20.0)	20 (26.3)
高校のみ	2 (28.6)	0 (0.0)	2 (28.6)	3 (42.9)	7 (9.2)
無し	1 (50.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (50.0)	2 (2.6)
	17 (32.1)	4 (7.5)	32 (60.4)	23 (30.3)	

図９．受講生の身体表現(ダンス)の経験と
受講生による設定保育実習の選択内容の関係

４．考　察

保育実習における実習内容の実態を調査し、実習中の受講生が実施した身体表現遊びの詳細を明らかにした。また、アンケートを用いて受講生が身体表現遊びに対して持つ意識やこれまでの経験を調査し、実習園(所)や受講生の設定保育実習活動の実態及び「身体表現Ｉ」受講後の受講生における乳幼児期の身体表現遊びの必要性に対する意識を検討した。

近年、めまぐるしく変化する社会情勢の中、子どもたちの健全な心と身体の育成を支えることは現代社会における重要課題である。成長過程において、子どもたちが豊かな感性や表現力を養い、創造力を豊かにするにあたり[15,16]、身体表現遊びを積極的に取り入れた保育活動は不可欠である。しかし，「身体表現」には、定型的な枠で捉らえにくいことから、研究実績は十分でない[17]。そのため，保育実習の実態のみならず、保育者を目指す受講生のこれまでの背景を調査し、身体表現遊びに対する意識に授業や保育実習が与える影響を検討した本研究は、保育者育成校における授業内容構築などに貢献できると考える。

実習園(所)及び設定保育実習時の実態について

実習所(園)の身体表現遊び実施状況

受講生が保育実習に参加した実習園において、保育活動中の身体表現遊びの実施状況は、76 園中 41 園が実施しており、実施している園の方がやや多い傾向であった(図 1)。このことは、領域「表現」の改訂後 30 年という年月が経っているにも関わらず、未だに身体表現遊びが 1 日の保育活動のカリキュラムの中に定着していないことが影響している可能性がある。目まぐるしく数多くの行事をこなす幼稚園や保育園では、保育者らが理想とする身体表現活動を展開するための十分な時間的・人的ゆとりがないと指摘している[3]。更には保育者自身が表現力に自信が持てず、苦手意識から子どもに指導することに消極的になっていること[4-6]が半数近くの受講生が実習中に身体表現遊びを保育活動に経験できなかった要因であると考える。

設定保育実習の実施状況

調査の結果、設定保育実習において約 70%の受講生が、領域「表現」(分野：身体表現、音楽，造形を含む)を実施したことが明らかとなった (図 2)。また、表現の中でも造形を 60.4%の受講生が取り入れており、身体表現は 32.1%、「音楽」7.5%であったことが示された(図 3)。杉浦[18]は、中学校教諭が精神的に最も疲弊してしまう教科は音楽であり、次いで美術となることを明らかにしている。また、保育者養成校を始め大学，短大にかかわらず、多くの受講生は美術に苦手意識を持ち入学してくることが報告されている[19]。そのため、保育実習では造形を取り入れることは少ないと予測されていたが、興味深いことに本研究における保育実習に参観した受講生の多くは造形を遊びとして取り入れていた。保育実習までに造形の授業を実施したことで、造形に対する知識が深まり、設定保育実習への準備が経験としても精神的にもできていたのではないかと推察する。造形とは対照的に、身体表現においては、保育実習前に受講生は身体表現を未受講であり、乳幼児の身体表現の重要性や年齢に応じた身体表現活動に対する知識を深め、事前指導を受けることが出来なかった。幼児に身体表現活動を提供すある際は、子どもたちへの言葉がけが随時必要である[20]。また、恥ずかしさを取り除きリズムにのり積極的に参加するが求められる。そのため、受講生にとって表現力や創造力の高度な技能が必要な創作的な身体表現遊びを取り入れることは困難であり、これまでに授業で習得した技能で実習に取り組んだためと推察する。また、多くの受講生が造形を実施した要因として、竹内[21] が述べているように、音楽や身体表現は、その表現がこの世界に存在し続ける限り、表現者(主体)はその表

現行為を続けていることが必要であり、表現行為を終結すると表現結果は消滅する。一方で、造形表現の場合は、表現結果としてその表現者(主体)から時間的、空間的に切り離されても存在し、完成までの一連の過程であり、その場だけの表現行為だけではない。よって，音楽や身体表現を実施することは受講生自身が主体となり幼児へ働きかけが常時必要となる高度な技術を要し、造形は、見守る時間も発生し落ち着いて幼児に関わることができるため受講生は選択しやすかったと推察される。

設定保育実習では、ごっこ遊びや手遊びなどの受講生が日常的な行動の経験や手軽にできる身体表現遊びを実施していることが明確になった。ごっこ遊びの方が手遊びより少数ではあるが多かったことから、受講生がごっこ遊びの題材のイメージを持って創作表現をしたことが窺える。多久保ら[10]の保育者養成校の受講生116名を対象に幼稚園実習時における実施した表現活動内容を9種のカテゴリーに分けて調査した。その結果、表現する内容を特に考える必要が無く、決められた動きをそのまま子どもに伝えることができる表現や自由に内容を変えることができる表現を受講生は好んで表現活動として取り入れることを示した。また、動きそのものに意味づけの必要が無く、子どもに表現するための動機付けが必要となる表現は受講生に懸念されやすいことを示した[10]。本研究において、身体表現遊びを実施した受講生17名と少人数であったが、ままごとなどの人物などになりきるごっこ遊びが最も多く取り入れられており、多久保らの結果と類似していた。上位を占めた身体表現遊びの内容と実施されなかった内容も変わりがないことから、本受講生においても余り創作することがなく、手身近に実施できる既成的なダンスを好み、身体表現遊びに対する受講生の意識が類似する傾向であると推察される。

中等教育機関における身体表現(ダンス)の経験

アンケート調査の結果、受講生の61.8%が中等教育機関で身体表現を経験し、中等教育機関のどちらかで35.5%の受講生が身体表現を経験していることが明らかとなった。よって、本学に入学するまでの中等教育機関において身体表現を経験している受講生は98.4%で、殆どの受講生が身体表現を経験していることが示された。

乳幼児期における身体表現遊びに対する認識度

15回の授業受講後、65.8%の受講生が今後の保育活動に乳幼児期の身体表現遊びに対する意識に関して「とても思う」と解答していることが明確になった。また、「まあ思う」と32.9%の受講生が回答しており、殆どの受講生が乳幼児期の身体表現遊びは必要であると認識していることが明らかとなった(図6)。

本研究の対象となった受講生が受講した「身体表現Ⅰ」の授業では、1.リズム遊び、 2.伝承・郷土遊び、3.身体表現遊び①(手遊び～全身を使用しての身体表現)、4.身体表現遊び②(動きからの表現・イメージと動き・即興的な身体表現を伴うお話作り・オノマトペや言葉がけ使用)、5.基本的動作あそびや基本ステップ、6.各種リズムダンスについて実習授業を実践した（参考資料Ⅱ）。授業では、受講生が自信をもって子どもたちに指導、援助できるように初歩的技能から基礎技能までの課題を実践した。また、受講生の個人の身体表現能力や創造力の違いを鑑み、グループワークを活用して意見交換などをさせながらの創作活動に入り、子ども役と保育者役を決め実践練習を行うようにした。

特に、今回，受講生の保育実習の実態調査から、設定保育実習にも取り入れやすいような「手遊び」や「リズムダンス(体操)」を取り入れ、難しい創作身体表現に偏らないように配慮した。実践実習と共に乳幼児期の身体表現遊びの必要性について説明し、受講生にも身体表現に関する課題を学修させた。筆者は、以上の授業内容を受講した受講生が、乳幼児期において身体表現遊びの必要性を認識してもらえたのではないかと推察する。しかし、保育実習において、自信をもって身体表現遊びを取り入れるためには、自身の感性を豊かにし、表現力を磨く努力をしてもらわなければならない。そのためには、本学での身体表現の授業において、模擬保育実習を多く活用し[22]、今後の設定保育実習には、年齢に応じた身体表現遊びが臨機応変に実践でき、子どもと共に楽しく身体表現ができるような実習の取り組みを期待する。

今後実施したい身体表現遊びの内容

アンケート調査より、型のあるダンスを149名の受講生が、型のないダンスを97人の受講生が取り入れたいと回答していることが示された。川野[7]が指摘しているように、身体表現の経験がある，或いはダンスが好きな受講生でも型のないダンスを実施するのには、イメージから動きを創作することが難しく戸惑いがあるため、

型のあるダンスを半数以上の受講生が選択したと示唆する。 また、型のあるダンスの中でも，手遊びやリズムダンスを選択する受講生が多く、慣れ親しみやすい音楽表現も含んだ表現が受講生は取り組みやすいと感じていることを示した。保育を目指す受講生を対象に授業後の学習における自己評価と表現・ダンスに対する意識のアンケート調査を実施した宮下[8]の報告でも、自己の表現とリズミカルな動きについては、半数以上の受講生は満足感や充実感を得ており、リズミカルな動きと創作的身体表現の比較ではリズム系を好む傾向が強いこと明らにした。本受講生においても音楽を含むリズム的な身体表現を好む傾向にあるが、本授業を通じて，創作することや表現することの楽しさを味わい、身体表現活動をする意欲や自信が湧いてきていることを窺われる結果であった。

実習園の身体表現遊び実施の有無と受講生による設定保育実習の選択内容の関係

実習園の身体表現遊び実施の有無に関係なく、60.4%の受講生が、造形を設定保育実習に実施したことが調査から明らかとなった。保育実習以前に造形表現を受講してし、実習前に知識を身に着けていたことで多くの受講生が保育実習で実施したと考える。また、設定保育実習の内容の選択は、受講生が身体表現を計画していても実習園の行事等で時間が確保で着きない場合や、実習園の保育活動計画により保育士から提案され[11]、他の分野で実習せざるを得ない状況も発生すると考えられる。

受講生の身体表現(ダンス)の経験と受講生による設定保育実習の選択内容の関係

中等教育機関における身体表現の経験と設定保育実習時の身体表現遊びの実施との関係を検討したところ、身体表現を経験していても30.3%の受講生が領域「表現」を実施していなかったことから、身体表現の経験は身体表現遊びの実施に影響を与えない可能性が示唆された。しかし、久保[23]は、ダンス経験が豊富な受講生は，苦にすることなく楽しんで創作活動に参加し、ダンス経験の乏しい受講生は、創作することが大変困難であり、創作活動に消極的であると述べている。中村[24]は，受講生の中学校及び高等学校で経験した身体表現の授業の内容は、現代的なリズムダンスが多く採択され、理想する生徒一人ひとりが自分なりに音楽のリズムに乗って自由に動きを工夫して踊るダンス授業は提供されていないことを指摘している。この様な現状の義務教育や高等学校での表現指導では豊かな表現は身につかないと、米倉[6]は報告している。よって、本研究に参加した受講生も、中等教育機関では少なくとも数年以上に渡る身体表現教育を受けているが、観察実習や参加実習を実践した際に幼児の身体表現が、過去に経験した身体表現とは違うものであり，戸惑いがあったのかもしれない。また、過去の身体表現の経験が楽しいものばかりではなく、他者と比較やその表現自体を否定されるような経験により，人前で身体表現をしたことが苦い経験となり[21]、ただ恥ずかしさだけが残っている受講生もいるのかもしれない。今後の調査においては、過去に経験した身体表現の内容も詳細に調査する必要がある。石川ら[25]は、人前で一人で発表したり歌ったりする際に、責任をもってできない者が多いことや、人と違う動きや言動に抵抗感や羞恥心を感じる受講生もいることを指摘している。そのため、本受講生の多くは身体表現の経験はしているが、保育実習の時点において、まだ身体表現の授業を受講しておらず、自身の表現力に不安があり実践する自信の無さが設定保育実習に取り入れることができなかった要因とも考えられる。

今後の研究課題

本研究では過去の中等教育機関以外での身体表現遊びの経験は不明であり、受講生の特性も調査していない。更に、受講生の身体表現に関する意識調査は身体表現の授業の受講後にしか行っておらず受講前の意識は不明である。今後の研究課題として、受講生の自己省察を分析するために、より詳細な調査を実施する必要がある。

5. まとめ

本研究ではアンケート調査を実施し、保育実習時における身体表現遊びに係る実態と、個々の中等教育機関における身体表現の経験および身体表現遊びに対する意識を調査し評価した。

1. 受講生が保育実習に参加した実習園(所)において、全ての園が身体表現遊びを実施してはいなかった。保育者自身が表現力に自信が持てず、苦手意識から子どもに指導することに消極的になっていることが要因であると判断された。

2. 受講生の約 70%が、設定保育実習時に領域「表現」を実施し、表現の中でも「造形」を選択した受講生が 60%を占め、「身体表現」や「音楽」よりも多く取り入れたことが明らかとなった。身体表現遊びの実践においては、子どもたちへの言葉がけや、リズムにのって積極的に行わなければならないことへの恥ずかしさなどが加わるため、「身体表現」や「音楽」の実施に対し消極的になる傾向があると判断された。
3. 設定保育実習では、ごっこ遊びや手遊びなどを実施した受講生は日常的な行動の経験や手軽にできる身体表現遊びを実施していることが明確になった。また、手身近に実施できる既成的なダンスを好む傾向であると判断された。
4. 保育者養成校に入学するまでに 97.4%の受講生が身体表現を経験していることが明らかとなった。
5. 受講後、殆どの受講生が乳幼児期の身体表現遊びは必要であると認識していることが明らかとなり授業の重要性が判断された。
6. 実習園の身体表現遊び実施の有無に関係なく、60.4%の受講生が、造形を設定保育実習に実施したことが調査から明らかとなった。実習前に知識を身に付けていたことだけでなく、実習園からの支持や提案に影響されたと判断された。
7. 身体表現を経験していても 3 割の受講生が領域「表現」を実施していなかったことから、身体表現の経験は身体表現遊びの実施に影響を与えない可能性が判断された。

本研究においての身体表現の分野に着目し得られた知見は、保育者を目指す受講生が、身体表現遊びを通して子どものこころとからだを育み、感性豊かな自己表現が出来るように導くための手立てとしての貴重な知見をもたらすことができた。

6. 引用文献・参考文献

1. 仲田幸世:(2013)イメージをうごくや言葉で表現できる子を育てる援助の方法　―劇遊びから劇創りを通して―,沖縄市立美里幼稚園.
2. 青山優子、井上勝子、蛯原正貴、小川鮎子、小松恵理子、高原和子、瀧信子、宮嶋郁恵、矢野咲子：(2020)乳幼児のための豊かな感性を育む身体表現遊び、(株)ぎょうせい
3. 長野真弓：(2010)幼児における身体表現活動の実践・研究の課題ならびに科学的視点からの提案、心理社会的支援研究、創刊号、pp29-34、
4. 高原和子、瀧信子、矢野咲子、怡ゆき絵、青木理子、小川鮎子、小松恵理子：(2016)保育者養成における身体を使った表現（身体表現）指導の実態、第 69 回日本保育学会、pp71-75.
5. 宮下恭子：(2011)「学生のダンスや身体表現についての意識や自己評価に関する研究」、東京成徳短期大学紀要第 44 号、pp1-16.
6. 米倉慶子：(2017)身体表現指導のあり方、西九州大学短期大学部 幼児保育学科実践報告、pp89-93.
7. 川野裕姫子：(2021)保育者養成校における学生の身体表現に対する意識と授業の実態に関する調査研究―「身体表現Ⅰ」の授業活動におけるアンケート調査から―、神戸教育短期大学　教育実践研究紀要　第 2 号、pp51-61.
8. 宮下恭子：(2011)学生のダンスや身体表現についての意識や自己評価に関する研究、東京成徳短期大学紀要第 44 号、pp1-16.
9. 遠藤晶：（2006）幼児の身体表現の指導に関する保育者の意識について―身体表現の指導に関する困難さについてのアンケートの検討を通して 武庫川女子大学紀要（人文・社会科学）54, pp91-99.
10. 多久保治江、田辺圭子：(1997)保育者養成における表現活動について(2)、北陸学院短期大学紀要第 9 号、pp27-40.
11. 林富公子：(2016)実習の実態と立案指導、夙川学院短期大学　教育実践研究紀要、pp33-69.
12. 松原豊：「幼児の身体表現」、第 1 巻　リズムスキル・コミュニケーションの発達とダンス―型のあるダンスを中心に―、第 2 巻　想像力・創造力の発達とダンス、―型のないダンスを中心に―、子ども教室宝仙大学、（株）新宿スタジオ.
13. 厚生労働省：(2018)「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」（厚生労働省雇用均等・児童家庭局長）.
14. 厚生労働省：(2018)「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」（厚生労働省雇用均等・児童家庭局長）、別紙 2、保育実習実施基準.
15. 文部科学省：(2018)幼稚園教育要領解説　第 2 章ねらいと内容「表現」

16. 厚生労働省：(2018)保育所保育指針解説　第 2 章 保育の内容「表現」
17. 古市久子： (2007)身体表現の発達に関する研究の現状と課題、児童心理学の進歩,46, 金子書房、pp171-195.
18. 杉浦篤子：(2009)子どもと造形、藤女子大学紀要、第 46 号、第Ⅱ部、pp101-112.
19. 杉浦篤子、鉢呂光恵：(2001)、保育者養成における造形美術専門者の育成、藤女子大学紀要、第 39 号、第Ⅱ部、pp39-66.
20. 塩崎みずほ：(2017)幼児の身体表現遊びにおける言葉がけに関する研究―身体表現遊びのための指導シートの作成をめざして―、秋草学園短期大学紀要　34 号、pp111-123.
21. 竹内貞一：(2107)子どもの表現活動における身体性とコミュニケーション―音楽および身体表現の特性の視座から―、東京未来大学研究紀要、pp131-137.
22. 上村昌：(2013)保育者養成段階における保育実践力の向上に関する―考察(2)、高田短期大学紀要第 31 号、pp79-88.
23. 久保景子：(2019)学生の身体表現に関する意識調査、有明教育芸術短期大学紀要 第 10 巻、pp93-104.
24. 中村恭子：(2013)、日本のダンス教育の変遷と中学校における男女必修化の課題、Japan Journal of Sport Sociology,21-1,38-51.
25. 石川ますみ、重松悠希：(2016)保育士養成校における学生の表現活動に対する意識変容につながる指導法の検討①、豊岡短期大学論集 No.13,pp59-68.
26. 松本千代栄編著：(1980)ダンス表現学修指導全集 表現理論と具体的展開、pp108-163,修館書店.
27. 青木理子、青山優子、井上勝子、小川鮎子、小松恵理子、下釜綾子、高原和子、瀧信子、宮嶋郁恵：(2019)新訂,豊かな感性を育む身体表現あそび、pp23-75,(株)ぎょうせい.
28. 本山益子：(2003)子どもの身体表現の特性と発達,19,市村出版.
29. 矢野下美智子：(2019)保育者養成における身体表現の授業のある方について「身体表現を好きになること」と「授業内容」の関係、広島文化学園短期大学保育学科紀要,pp31-37.

参考資料

参考資料Ⅰ:「 身体表現Ⅰ」の受講学生の保育実習の実態調査及び授業後のおける身体表現活動（遊び） に関する意識調査

「身体表現Ⅰ」の受講学生の保育実習の実態と身体表現活動（遊び）に関する意識調査のお願い この調査は、研究のための資料としてのみ扱われるもので、個人のプライバシーを侵害したり、研究以 外の目的で使用したりすることは一切ありません。
安心して以下の調査に協力していただきますようお願いします。
各設問につきましては、最も該当する番号や記号一つに○をつけて下さい。( ) 内には 該当する数字や言葉を記入して下さい。 尚、複数回答可能な場合もあります。

Ⅰ-1【身体表現Ⅰの授業前においてのアンケート】

以下の設問は、2020 年の 3 月と 2020 年９月の保育実習においての設定保育実習（部分保育、半日保育、全日保育を含む）に関してお尋ねします。

1. 実習園で取り上げられていた身体表現はありましたか。
   1. はい　　2.いいえ

2. あなたは、設定保育実習の遊びでは領域「表現」（分野：身体表現、音楽、造形）の活動を取り入れましたか。
   1. はい　　2.いいえ

2 の設問で 1.「はい」と回答された人のみ 3 の回答をお願いします。
3. あなたは、表現活動を取り入れた遊びの中で、身体表現、音楽、造形の中のどの分野を取り入れましたか。
   1. 身体表現　　2.音楽　　3.造形

3 の設問で 1.「身体表現」と回答された人のみの 5 の回答をお願いします。
4. あなたは、何故、身体表現活動（遊び）を取り入れたのか。その理由を 記述してください。
   (　　)

5. あなたは、身体表現遊びの中でどのような遊びを取り入れましたか。下記より選んで回答して下さい。 （複数回答可能）

(1)型のあるダンス （振り付けや構成があらかじめ決められている）
   1. 既成の曲に振り付けられたダンス
   2. リズムダンス
   3. 伝承的、郷土的遊び（わらべ歌）
   4. 手遊び
   5. 歌遊び
   6. 発表会用ダンス
   7. フォークダンス

(2)型のないダンス（振り付けが決まっておらず即興的に動いたり創造したりする）
   8. 模倣遊び
   9. リズム表現
   10. ごっこ遊び（ままごと、忍者）
   11. 即興的ダンス
   12. 身近にある素材を使用した身体表現（新聞紙、タオル、ゴム紐、縄など）=見立てた身体表現
   13. 創作身体表現遊び（生活・体験、空想・物語りの世界など）

2 の設問で 2.「いいえ」と回答された人のみ 6 の回答をお願いします。
6. あなたは、何故、身体表現遊びを取り入れなかったのか。理由を記入してください。
   (　　)

Ⅰ-2【身体表現Ⅰの授業後におけるアンケート】

以下の設問は、身体表現（ダンス等）に関してお尋ねします。

1. あなたは、中学校あるいは高等学校の授業で身体表現活動（ダンス等）の経験がありますか？
   1. 両方ともある　2.中学校のみある　3. 高等学校のみある　4.両方ともない

以下の設問は、身体表現Ⅰの受講終了後の身体表現活動（遊び）に関する意識についてお尋ねします。

1. あなたは「身体表現Ⅰ」の授業を受講して、今後の保育活動における保育活動は乳幼児期に必要と 思いますか。
   1. とても思う　2.まあ思う　3. あまり思わない　4.全く思わない

1 の設問で「 1. とても思う、2.まあまあ思う」と回答された人のみの 2, 3 の回答をお願いします。

2. あなたは、保育者として身体表現活動（遊び）が乳幼児期に何故、必要と思いますか。その理由を記入して下さい。
   （　　）

3. あなたは、今後、保育実習時の設定保育実習では、Ⅰ-1 の５の設問の身体表現活動（遊び）の中でどの遊び を取り入れようと思いますか。Ⅰ-1 の５選択肢から該当する番号を回答して下さい。（複数回答可能）
   （　　）

1 の設問で 「3. あまり思わない、4.全く思わない」と回答された人のみの 4 の回答をお願いします。

4. あなたは、保育活動における身体表現活動（遊び）は乳幼児期に何故、必要ではないと思いますか。 その理由を記入してください。
   （　　）

参考資料Ⅱ：具体的な指導内容

１．リズム遊び

音の変化（強弱、高低、リズム）や音楽を感じながらの身体活動を通して、リズムにのる楽しさを味わい、リズム感を養うことを目的とし[26]、「リズムあそび」を実施する。例として、 ①手首や腕の回転及び上下移動、②ハンカチやビニールを使用しての回転、あるいはそれらを上下に投げるなど、それぞれの動作を観ながら、手拍子で音の強弱、高低、やリズム変化を行う。また、からだを使ってのリズム変化、曲や色々なリズム（２拍子、４拍子、３拍子）を手拍子や足拍子で行う。また、「落ちた落ちた」の歌のリズム表現を楽しませる。

２．伝承・郷土遊び

場所を問わずに手軽に遊ぶことができる身近な伝承的・郷土的な表現あそびを取りあげる。伝承的・郷土的な表現あそびは、祖父母から父母へ、父母から子どもへと伝えられ、スキンシップを通して心と心を通じ合わせ、人と人との間に信頼感や安心感を育む重要な役割も果たす[27]。本授業では学生が懐かしいと思う曲を選曲し、「なべなべそこぬけ、おちゃらかほい、かごめかごめ、花いちもんめ、ずいずいずっころばし」の歌に合わせて表現あそびやゲームを取り入れながら行う。

３．身体表現遊び①

手あそびは、子どもが集団生活の中で初めて友達とふれあい、協力するあそびであり、子どもが親しみやすく表現力を要する手遊びである[6]。本授業では、手あそび（手をたたきましょう、グー・チョキ・パー、とんぼのめがね、でんでんむし、ひげじいさん、おべんとうばこ、不思議なポケットなど）や歌あそび（全身を使っての身体表現＝大きな栗の木の下で、どんぐりころころ、まつぼっくり、やきいもグーチーパー、おとけいさん、おちゃらかホイ、幸せなら手をたたこうなど）を取り上げる。学生がよく知っている歌に合わせての身体表現やじゃんけんゲームも取り入れ、表現活動ばかりにならないように配慮する。

４．身体表現遊び②

動きからの表現やイメージしたことを表現する活動を通して、動く喜びを味わう感性や表現力を養うために、初歩段階から基本段階である①動きから表現（いろいろな動き）、②イメージと動き、③音と動き、また発展として④まとまりのある動きを体験させる必要がある[27]本授業では、身体表現の初歩的段階として「みたてて（物、電車など）」、「なりきって（人物、動物など）」、基本的段階として（身近な事象課題の即興的な身体表現を伴うお話づくり）の表現を、また、その展開として（空想・物語の世界から身体表現を伴うお話づくり）と、擬

態語・擬音語・擬声語（オノマトペ）や言葉がけを取り入れた表現を取り上げる。

５．基本的動作あそびや基本ステップ練習

この体験は子どもに欠かせない身体能力を養うために必要な基礎技能である[6]。基本的な動きである歩く、走る、とぶ、ころがる、まわる、ゆれる、その他（押す、引く、つく、ちぢむ、のびる、緊張、脱力）を実施する。基本ステップはダンスの基本技能であり、創作リズムダンスへと発展させるためには必要な要素となる。様々なステップ（2拍子、4拍子、3拍子、スキップ、ギャロップ、ツーステップなど）に上半身の動きを加えて指導する。

６．各種リズムダンス

学生にとって「表現あそび（猛獣狩りに行こう、落ちた落ちた）」、「型のある踊りの創作（子どもが踊れるフォークダンンス）」、「音楽に振り付ける（子どもの歌＝おもちゃのチャチャチャ、ぶんぶんぶんなど）」[28]の表現活動は、楽しいことが明らかであり[29]導入した。表現活動がスムーズにできない学生に配慮し、中学、高等学校でも取り入れているフォークダンス（ジェンカ、タタロチカ、マイムマイム）や音楽（選曲：おもちゃのチャチャチャ）に合わせた創作リズムダンス（グループワーク）を行う。本授業では、リズムダンスを創作し、踊る楽しさを味わい、次のステップに繋げるようにする。

ピアスーパーバイザーからのコメント

本論文は、保育実習における身体表現遊びの実態及び受講生の身体あそびに対する検討をしっかり、アンケート調査を行っています。

多くの受講生が乳幼児期の身体表現あそびは必要であると意識していることが明らかになり、授業の重要性が判断されたことは、身体表現遊びを通して、子どもの心と身体を育み、感性豊かな自己表現ができる手立てとして貴重な知見をもたらしたと考えます。

本実践報告の知見が多くの先生方に共有されることを願っています。

（担当：今津　香）

＜執筆者一覧＞

神戸教育短期大学　こども学科

教授　　山本　章雄/スポーツ科学（スポーツ教育学）

神戸教育短期大学　こども学科

非常勤講師　吉富　由佳子/心理学（福祉心理学）

神戸教育短期大学　こども学科

講師　　川野　裕姫子/スポーツ科学（スポーツ教育学）・測定評価

大阪工業大学　教務部　Language　Learning　Center

助教　　橘　未都/ダンス

福井工業高等専門学校　一般科目教室

准教授　　青木　宏樹/測定評価

＜ピアスーパーバイザー一覧＞

神戸教育短期大学　こども学科

教授　　井本　英子/芸術学（音楽学）

准教授　　辻本　恵/芸術学（彫刻）

講師　　今津　香/教育学（乳児保育）

神戸教育短期大学「教育実践研究紀要」
第 3 号（2021）
2021 年　9 月 1 日発行
編集発行：神戸教育短期大学
ファカルティ・ディベロップメント委員会
〒653-0862　兵庫県神戸市長田区西山町 2-3-3
TEL:078-611-3351（代表）

印刷所